



20年のあゆみ

国際交流基金 日中21世紀交流事業
2006～2026



日中21世紀交流事業 20周年にあたって



独立行政法人
国際交流基金 理事長
黒澤 信也

国際交流基金が2006年に日中間の青少年交流促進を目的として立ち上げた日中21世紀交流事業は本年でちょうど20周年を迎えました。この間、日本と中国の将来を担う若者同士が、互いの心と心をつなぎあうという意味の「心連心」という言葉をキーワードに、様々な交流事業に参加していただきましたが、この度その成果を1冊の冊子としてまとめました。

この20年間、途中、コロナ禍をはじめ多くの困難にも見舞われましたが、のべ472人の中国の高校生が日本での約1年間の留学生生活を送りました。また中国の地方都市に設置した「ふれあいの場」は15を数え、そこを舞台に行われた大学生交流事業においては、これまで127の日本側グループが参加し、中国側の大学生と共に文化交流イベントの企画から実施まで行いました。

本冊子に登場してくださった参加者の中には、既に実社会で活躍され、日中の友好関係に寄与されている方々も多くいらっしゃいます。新しい事業を立ち上げるだけでなく、「続ける」ことの大切さを主催者として改めて噛みしめています。本冊子の読者の中からも、次世代の日中交流の担い手が数多く生まれることを願ってやみません。

最後になりましたが、20年にわたる交流事業の実施にあたっては、参加者やそのご家族、受入校やホストファミリーはもちろんのこと、中華人民共和国駐日本国大使館、在中華人民共和国日本国大使館、中華人民共和国駐日本国大使館教育部、中国教育国際交流協会をはじめとした、多くのみなさまのご助力をいただきました。心より深く御礼申し上げます。

国際交流基金日中21世紀交流事業について

国際交流基金では、日本と中国の将来を担う若者たちが心と心をつなぎあう「心連心（しんれんしん）」を合言葉に、日中間の青少年交流を推進していくことを目的に、主に「高校生交流事業」「中国ふれあいの場事業」「ネットワーク強化事業」の3つの事業を実施しています。

1. 人を育てる「高校生交流事業」

「中国高校生長期招へい事業」では、中国の高校生を日本の高校へ11か月招へいし、日本各地で留学し交流を行う機会を提供しています。「対話協働プログラム」ではオンラインで日本と中国の高校生が交流し、お互いの文化や社会について理解を深める機会を提供しています。

2. 人が集う「中国ふれあいの場事業」

中国の地方都市に日本文化を発信する拠点「中国ふれあいの場」を設置し、中国の方々に広く日本文化に触れていただく場として様々な活動を実施しています。

さらには中国ふれあいの場の学生たちにとって関心の高い事柄に関して、専門家を招いた日本文化セミナーも実施しています。

3. 人を繋ぐ「ネットワーク強化事業（大学生交流事業）」

中国ふれあいの場事業の一環として、日本の大学生をふれあいの場へ派遣し、日中の学生が共同で交流イベントを実施しています。

このように、「日中21世紀交流事業」は人と人との繋がりを重視した草の根交流を通じて、日中両国の青少年が互いの絆を深めながら共に成長し、交流の輪を広げることを目指し事業を行っています。

日中21世紀交流事業 20周年記念によせて — 心連心を合言葉に

駐中華人民共和国日本国特命全権大使

金杉 憲治



日中21世紀交流事業が20年の節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。事業発足以来、日本と中国の将来を担う若者たちが心と心をつなぎ合う「心連心」を合言葉に、多くの中国の高校生が日本各地に留学し、交流が行われてきました。また、中国の地方都市に設置された「ふれあいの場」は、若者を対象とした日本文化発信の拠点として、学生レベルでの文化交流を促進してきました。実際に相手国に行き、交流と対話を重ね、自分の体験を通じて相手を理解することは非常に重要だと考えます。

20年にわたるこれらの取り組みは、日中両国の未来を見据えた架け橋となる人材を着実に育てるものです。本事業がこれからも日中両国の青少年に希望と可能性を提供し、日中関係の更なる発展に寄与されますことを期待いたします。

日中21世紀交流事業 20周年記念によせて

映画監督

西川 美和



日中21世紀交流事業20周年、心よりお祝い申し上げます。

私は、2024年夏到北京・武漢・杭州での拙作の特集上映会に参加しました。私の映画を知る人などいるのだろうかと不安を抱きつつの訪中でしたが、600席の中国電影資料館が超満員となり、サインを求めて万里の長城さながらの列ができていて、驚きました。中国の若い人たちは、漫画や映画を通じて日本の文化や生活に熱狂的な憧れや親しみを持ってくれていると実感しました。

日中が背を向け合って、良い未来が待つはずがありません。そのために一人でも多くの方が、互いの国に友人を作ることが必要です。そしてその手助けとなるのが、文化芸術の交流や、若い人が互いに学ぶ機会だとも思います。今後も国際交流基金の活動を中心にして、より一層の友好が深まることを期待しております。私も、再び中国の友人たちに届けられる日を心待ちにしながら、作品を作り続けたいと思います。

20年目の新たな節目における 新たな中日関係の共創

中華人民共和国駐日本国特命全権大使

呉 江浩



日中21世紀交流事業が実施から20周年を迎えるに当たり、中国駐日本大使館を代表してお祝いを申し上げます。

20年にわたり、当該事業は、中日青少年の交流と民心の疎通の促進に取り組むとともに、理解と友好の場を構築されてきました。青少年は、両国関係の未来そのものです。両国の若者が両国関係の政治基盤を共に維持しながら、交流の中で学び、協力の中で成長し、中日関係の健全かつ安定した発展を推進していくことを願います。

「心」の向かう所

声優・漫画家

劉 セイラ



私が日本語に初めて触れた時のことを振り返ると、そのきっかけは日本のアニメでした。当時の私は、日本語を全く理解できませんでしたが、声優さんたちの演技に心を動かされ、言語の壁を越えて、まるで自身がキャラクターの「心」に触れているように感じました。あの時の出会いは、私の人生を変えました。日本語と中国語の2カ国語声優として10年余り仕事を続ける中で、「心」こそが私たち人間の共通の感情であるのだと、私は強く気づかされました。今や、AI翻訳の技術は日増しに進歩しています。単に情報を伝達するだけなら、おそらく人間が介入する必要はもはやないでしょう。しかし、私たちは感情を持つ人間として、心を伴わない行動はできませんし、他者と交流する場面においても、「心」がなければ、交流の意味は失われてしまいます。国際交流基金さまは、20年にわたって数多くの「心連心」の場を作ってくれました。私も微力ながらその取り組みに貢献する機会をいただき、大変感謝しています。縁あって集まった仲間たちが、今後も友好交流を続けられることを願っています。どんなに時代が変わろうと、人と人の「心」がつながる瞬間が、最も大切なものであることに変わりはありません。「心」があれば、未来もきっと変わると信じています。

20周年のあゆみ・沿革

2006.9
中国高校生長期招へい事業スタート



高校生交流事業

2011
日本高校生訪中
事業スタート



2020
日中高校生対話・協働プログラムスタート



2023.9
第15期から再開



2020年から2023年までコロナ禍で一部中断

2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021 2022 2023 2024 2025 2026

中国ふれあいの場事業

2007.4
成都開設

2008.5
長春開設
2008.6
延辺開設
2008.12
南京開設



2009.9
西寧開設
2009.10
ハルビン開設
連雲港開設

2010.6
重慶開設
2010.9
広州開設

2011.7
大連開設



2012.3
杭州開設

2013.4
昆明開設
2013.11
済南開設



2014.11
杭州移転

2015.10
長春移転

2016.12
長沙開設

2016.5
南昌開設



2016.7
国際交流基金
日中交流センター設立
10周年記念レセプション

2018.7
アモイ開設

2018.7
桂林開設

2018.3
貴陽開設

2018.1
西安開設



2019.5
フフホト開設

2019.4
南京移転

2022.4
南昌移転



ネットワーク強化事業



2011.3
心連心ウェブサイト開設

2011.3
大学生交流事業スタート



2022.12
中国ふれあいの場サポーター事業



目次

高校生交流事業

1	Message	6-7	心連心：中国高校生長期招へい事業
2-3	20周年のあゆみ・沿革	8-9	修了生インタビュー「20年目の2人」
4-5	～3事業横断クロストーク～ 日本と中国の交流をつうじて	10	卒業生による自主サポート～現役生の留学を伴奏する心連心サポーター～
40	日中国交正常化50周年記念事業	11	修了生それぞれの歩み
41	日中21世紀交流事業テーマソング	12	修了生から17期生へ
		13	ホストファミリーインタビュー
		14	日本側受入校寄稿／文化用品・図書寄贈事業
		15	訪中事業
		16-17	1期～16期の修了生に聞きました！
		18-19	日中高校生対話・協働プログラム

中国ふれあいの場事業

20-21	中国ふれあいの場事業
22-23	ふれあいの場 活動紹介
24	ふれあいの場実務担当者会議
25	ふれあいの場を運営する学生たち
26-27	ふれあいの場運営ボランティアの学生に聞きました！
28	ふれあいの場学生代表訪日研修／ ふれあいパートナーズ事業
29	中国ふれあいの場 所在地と歴史

ネットワーク強化事業

30-32	大学生交流事業 活動紹介
33	大学生交流事業に参加して
34-35	大学生交流事業参加者による座談会 「あの時の挑戦が今の自分を作った」
36-37	大学生交流事業参加者に聞きました！
38	中国ふれあいの場サポーター事業
39	アルムナイイベント

座談会

Interview

～3事業横断クロストーク～ 日本と中国の交流をつうじて

日本での留学を経験した高校生も、ふれあいの場に参加した大学生も、立派な社会人になりました。今の私があるのは、あの日思いきって日中交流事業の門を叩いたから。事業をつうじて心と心を通わせた3人の先輩がフリートークで振り返ります。



人生でいちばん、
自分が変わった1年でした

樊雪妮さん

中国高校生長期招へい事業4期生／2009年9月～2010年7月、岩手県盛岡中央高等学校に留学。2016年にふれあいの場日本企業文化紹介セミナーへ講師として参加。早稲田大学卒業。現在は日本在住。

高校生長期招へい事業→P6

参加動機、印象に残るエピソード

樊● 国際交流や留学に積極的な高校（武漢）に通っていて、日本語の先生から国際交流基金（JF）の留学プログラムを紹介されたのがきっかけです。高校2年、まだ15歳でした。日本語は中学1年から勉強していたけれど、当時の実力はN2～3レベルで期待より不安の方が強かったです。それでも「よくも悪くも1年きり…、ならばトライしてみたい」と思い手を上げました。

馬● 私の場合は、日本文化を紹介しようと訪中した日本の大学生を、昆明ふれあいの場が受け入れたのが始まりで、チャンスが向こうから舞い込んできた感じです。当時は大学1年で、ほとんど日本語がしゃべれず、翻訳ツールを使いながらイベントの準備をしました。もちろん前から日本には関心があり、同年代の日本人と交流する機会をうかがっていたので絶好のチャンスでした。

樊● 日本に来て、最初に困ったのはやっぱり言葉でした。日本語がヘタ→コミュニケーションがとれない→ひとり落ち込む→友達ができないという悪循環でしたが、先生に相談すると部活に入ったらどうかとすすめてくれました。バレーボール部と茶道部に入り、特にスポーツは無心に頑張ることで通じあえるものがあったり、好きなアイドルも一緒だったりして、バレー部にたくさん友達ことができました。そこから先はもう日本の女子



日本との最初の出会いを
つくってくれたイベント

馬毓璠さん

中国ふれあいの場事業／昆明ふれあいの場卒業生。2015年3月に日本の大学生を受け入れ大学生交流事業に参加。現在は日本在住。日本企業に勤務。

中国ふれあいの場事業→P20



こんな贅沢な国際交流は
学生時代しかできない

中條奈菜花さん

ネットワーク強化事業／2014年3月、大学生交流事業に参加し訪中。重慶ふれあいの場にてイベントを実施。その後、日本でも中国の大学生を受け入れてイベントを実施。現在は地元岩手、民放テレビ局のアナウンサー。

ネットワーク強化事業→P30

高生と同じ毎日。普通に授業を受け、部活を楽しみ、修学旅行にも行きました。帰国する直前はみんなでプレゼント交換をし、泣きながら抱き合ったことを懐かしく思い出します。

馬● 私は昆明にきた日本人学生達に観光地を案内しました。日本人学生が、男子も女子も、とにかくモテモテだったのを憶えています。雲南省の食事は辛いものが多く、米線なんかは日本人は辛くて食べられないので、事前に一人ずつ確認しました。当時、知り合った日本人学生の何人かとはその後も連絡をとりあい、日本企業に勤めるようになった今も一緒に食事をしたりしています。日本と初めてのつながりができたのはあの1週間のおかげです。私にとってこの時間があつたからこそ、卒業しても日本と中国の架け橋になるよう頑張る理由になりました。

中條● 私は馬さんとは反対の立場で、大学2年のときに大学（岩手県立大学）の仲間と大学生交流事業に参加して重慶ふれあいの場を訪問しました。もともと中国人留学生が多い大学だったこともあり、国際交流サークルに所属していた私は第二外国語に中国語を選択していました。私たちが考えたイベントのテーマは日本のまつりです。地元盛岡の夏祭り「さんさ踊り」を紹介しようと、屋台を出したり一緒に踊りを踊ったりしました。日本で、自分たちにとっては毎年恒例のまつりや日本の文化が、中国の若い人た

ちにも楽しんでもらったことが素直にうれしかったですね。

対日本（中国）観の変化

樊● もともと日本が好き、日本文化への憧れがあったから大きく変わりはしなかったけれど、留学前より立体的に日本人を知ることができるようになったと思います。日本の方々は真面目で優しく、自己主張があまり強くないという印象を持っていました。けれど、実際に接してみると、グループでいるときと一人のとき、あるいはスポーツをしているときなど、日常とは異なる場面では、まったく違う一面を見せることもありました。そのような経験を通して、人は状況に応じて自分のアイデンティティを使い分けているのだと気づきました。そして、人を一つの側面だけで評価すべきではないということ学びました。これまで見えてこなかった日本の若い人達の実像に触れることができよかったです。

馬● 当時、雲南省で日本人を見る機会はとても少なく、大学生くらいの若い人とふれあう機会などありません。経済力があれば日本留学がいちばんだらうけどそれも難しいので、実際に会って話をできる機会をもてたことが何よりうれしかったです。これを機に日本語をもっと勉強したい、日本という国をもっと深く知りたいというモチベーションが膨らんでいきました。

中條● 歴史的な背景や日本を訪れる一部観光客の爆買いだとか、中国に対しては特に親世代がネガティブなイメージをもっていると感じていました。ただ、私は中国人留学生と親しくなり、また現地での交流体験を経て、そうした偏見は完全に払しょくされていました。故郷のまつりを中国に紹介しようと打ち込み、中国文化を日本に紹介しようと行動する私を見て、両親も次第に理解を深めて活動を後押ししてくれるようになりました。身近で大切な人の中国へのイメージをいい方向に変えることができ、本当によかったです。

まだ見ぬ後輩たちにメッセージを

樊● もう14年も日本に住んでいますし、これからもここで生きていこうと思います。これからJFの留学プログラムに参加したいけれど、言葉の問題もあって躊躇しているという後輩たちには、「恐れずにチャレンジしてください」と伝えたいです。



私が、身寄りも何もない盛岡の高校に留学した当時は、SNSなど今のよう通信手段もほとんどありませんでした。それでも、なんとか頑張り切ることができました。私にとって留学した1年は、間違いなく、人生でいちばん自分が変わった1年になりました。楽しいことも、もしもいやなことがあったとしても、絶対にその後の人生の糧になると思うからです。

そして、2つの異なる文化を経験することは、社会やメディアからの情報を鵜呑みにせず、自分自身の判断軸をしっかりと築くうえでも、大きな助けになりました。

馬● 何回か転職した後、今は日本企業に勤め、コンサルティングとグローバル営業強化支援に従事しています。会社にとっては新規事業となり、アイデアのないところからカタチにするのはとても勇気やエネルギーのいることですが、それをむしろ楽しんでやっている自分がいます。そんな私の行動力の礎となったのが、ふれあいの場活動における成功体験だったように思います。日本語が分からなかったとしても足踏みしないでほしい、この日中交流事業は参加するだけでも意義がある、自分の経験から私はそう思います。

中條● 学生のときは気がつかなかったけれど、社会人になると国際交流する機会や時間を1週間程確保するのは難しいのが現状です。大学生交流事業は、学生時代だからこそできた贅沢なイベントだったと、今強く感じています。おかげで私には信念が生まれました。それは、友情に国籍は関係ないということです。交流を通してお互いの文化を理解し合い、みんなで協力することで何もないところから大きなことを実現できました。この経験と出会えた仲間は一生の誇りです。今後、年を重ねるごとにまた頼もしい仲間が増えていくことを期待しています。

取材日：2025年10月26日



中国高校生長期招へい事業

未来志向の日中関係を築く礎として、より深い青少年交流を実現するため、日中両政府間の合意に基づく初めての「長期招へい事業」を2006年から開始しました。

日本語を学ぶ中国の高校生を約1年間日本に招へいし、日本各地の高校で学校生活を送る機会を提供しています。日本の社会や文化をより深く理解するとともに、同世代の日本人との友情関係の形成を図ることを目的としています。

招へい生たちは、ホームステイや寮生活をしながら、日本の高校生と同じように地元の学校に通い、部活動に参加し、友達を作り、ホストファミリーや寮の皆さんに囲まれながら留学生活を送ります。

2006年9月に第1期生が来日してからこの20年間、中国人高校生が日本の生活を体験し、周りの日本人との異文化交流をとおして、互いに理解を深め合ってきました。15、6歳で来日した彼らは1年後、たくましく成長して中国に帰国していきます。第1期生から第17期生まで、累計472名が来日し、45都道府県で受入が実現しました。すでに帰国した修了生の多くが、進学や就職で再び日本を訪れ、「日中両国の架け橋」として活躍しています。

受け入れ実績

- 第1期生 37名 (男15:女22)
- 第2期生 37名 (男14:女23)
- 第3期生 26名 (男4:女22)
- 第4期生 35名 (男5:女30)
- 第5期生 38名 (男10:女28)
- 第6期生 32名 (男8:女24)
- 第7期生 32名 (男7:女25)
- 第8期生 30名 (男10:女20)
- 第9期生 31名 (男9:女22)
- 第10期生 31名 (男12:女19)
- 第11期生 31名 (男13:女18)
- 第12期生 30名 (男10:女20)
- 第13期生 26名 (男11:女15)
- 第14期生 26名 (男6:女20)
- 第15期生 9名 (男3:女6)
- 第16期生 12名 (男3:女9)
- 第17期生 9名 (男4:女5)

合計 472名



プログラム修了生の進路

日本在住修了生

- 第1期生 37名中17名
- 第2期生 37名中26名
- 第3期生 26名中19名
- 第4期生 35名中21名
- 第5期生 38名中24名
- 第6期生 32名中17名
- 第7期生 32名中23名
- 第8期生 30名中23名
- 第9期生 31名中12名
- 第10期生 31名中20名
- 第11期生 31名中16名
- 第12期生 30名中14名
- 第13期生 26名中9名
- 第14期生 26名中10名 (2025年5月時点)

● 受け入れ実績あり



来日後スケジュール

9月 来日研修



日本の生活に円滑に適應するうえで注意すべき点を把握し、日中交流の担い手として来日したことを自覚することを目的に、事業のルールならびに日本と中国の文化・習慣の違いについてレクチャーを行う。地震等の防災訓練、交通安全や防犯対策について講義を実施。

美術部へ入部!



12月 12月研修

来日3か月間を振り返り、各自の課題を発見・確認し、残りの留学生活をより充実させるための目標設定を行う。和太鼓ワークショップやフィールドワークを実施し、日本社会・文化への理解を深める。



翌年3月 中間研修



本プログラムで日本に来た目的・使命をもう一度思い出し、半年間でがんばったこと、成長できたこと、できなかったことを振り返る。これからの留学生生活をより充実させるために、目標を樹立する。



学校の勉強は大変だけど楽しい!

7月 帰国前 研修

日本滞在中の学習成果について発表し、各自の反省点から帰国後の目標を確認する。研修を通じて同期生同士の結び付きをより一層強め、報告会及び歓送会の場において、プログラム関係者に感謝を伝える。



鹿児島島のホストファミリー宅でホームステイ



心連心：中国高校生長期招へい事業 修了生インタビュー 「20年目の2人」

2006年にスタートした「心連心：中国高校生長期招へい事業」。第1期生は36人の高校生が日本へ留学した。うち、遼寧省瀋陽市出身の潘撼さんと、山東省済南市出身の王嫣さんはともに現在上海市に在住。20周年記念企画として、お二人の現在の生活を伺うとともに、当時の日々を振り返ってもらった。

ばん はん
潘 撼
さん



中国高校生長期招へい事業
1期生。2006年9月～2007
年7月、土浦日本大学高等学
校に留学。現在は中国の企
業にて開発職に従事。

「久しぶり!元気にやってる?」まだ残暑の厳しい9月の上海。ビルの一室で顔を合わせた2人は表情を崩した。ともに20年前、本プログラムの第1期生に応募した潘撼さんと王嫣さん。潘さんは茨城県の土浦日本大学高等学校へ、王さんは宮城県の仙台育英学園高等学校へ留学し、1年間「日本の高校生」としての日々を過ごした。

潘さんは中国の高校に戻った後、東京大学へ進学し再び日本へ。半導体関連の材料工学を専攻し、大学院でも学び、ソニーへ就職した。現在は中国の企業で開発職に就いており、「日本の技術者や業者さんと交流したり、日本語を使う機会も多い」そうだ。

王さんは遼寧省の東北大学日本語学部へ進学。日本へ再び留学し、その後、米イリノイ工科大学でMBAを取得、住友商事の上海オフィス勤務を経て、昨年よりドイツの総合化学会社ヘンケルの中国法人で働いている。ヘンケルはヘアケア製品も手掛けており、日本マーケット向けの製品などでときおり日本人との交流があるが、社内では英語を使うことが多い。

2人とも順調なキャリアを築いているが、日本への留学が与えた影響はどんなものだったのだろうか?まず当時、日本へ興味を持った入口を聞くと「漫画やアニメ」と口を揃える。中学生時代から日本語を勉強し、高校でも第二外国語で日本語を選択。そんな時にJFのプログラムを耳にし、「日本の文化にも興味があるし、もっと日本語勉強できるな」と応募した。

おう えん
王 嫣
さん



中国高校生長期招へい事業
1期生。2006年9月～2007
年7月、仙台育英学園高等学
校に留学。現在はヘアケア
製品の会社にて購買マネー
ジャーとして勤務。

こういった国際的なプログラムに応募して選ばれたという背景から、2人とも相当に優秀な学生だったと推察されるが、それでも留学当初は苦労した。

潘さんは「中国では家と学校の往復で勉強ばかりしている学生生活でしたが、日本に来ると周りは部活とかバイトとか色々なことをやっている。それが第一印象」とし、「最初の3か月はとにかく言葉で苦労しました。授業がなかなかわからないし、外でも買い物とか食事とか、店員さんの言葉がわからなくて」と振り返る。茨城県に留学したのは潘さん一人だけで、学校にほかに中国人がいなかった。

最初は少し寂しかったり、故郷に電話したりもしたそうだが、ホストファミリーの家族が休日に東京など色々連れて行ってくれたり、部活動もバドミントン部に参加。2、3か月目ぐらいから、得意の数学、化学など理系科目の授業がわかるようになり、面白くなってきた。

一方の王さん。「私の場合はラッキーで、同じ高校に私を含めて5人留学したので、色々助けられました」と微笑む。「ただ、中国の学校の寮って6人部屋とかなんですけど、日本の寮は1人部屋で。家族とか同級生とかがいなくて空間が初めてで、それが最初怖かった」と明かしてくれた。日本語や授業については、潘さん同様に慣れるまでは2、3か月ほど。部活動は弓道部に所属。中国では見たことのない競技で面白く、大会を目指して一緒に練習したりする中で、「ああ、漫画やアニメで描かれているの、こういう感じだ」と腑に落ち、感動したという。

部活動の体験は、日本や中国に対する見方も変えたようだ。王さんは「山東省は勉強のプレッシャーが強くて、勉強以外のことをするのは不真面目な感じがあったのですが、日本では自分の好きなスポーツとかに打ち込めて羨ましいと感じた」とし「仕事をしてからではなく、子ども時代に興味を探索する機会があるのは幸せだと思う」と話す。仙台育英と言えばスポーツ強豪校で知られ、部活動もそれなりに厳しかったと思われるが、「そういう苦しみも幸せだと思います。『犠牲なしには何も成し遂げられない』という、アニメで出てきた印象的な言葉があるのですが、何かに真剣に取り組んで、挫折したり苦しんで成長できる。チームで目標に向かって頑張ると、到達できなくても頑張った過程は残る。中国ではそういう経験はなかった。仕事のプレッシャーが強い時にも、その経験が生きています」と力強く話してくれた。

潘さんも「野球部とかの厳しさを見ていて凄いなと思って、それは高校時代の一番の印象かもしれない。辛いことへの耐性とか成長すると思います」と頷いていた。

潘さんはホストファミリーの元で暮らしたことで「普通のご家庭の日本人がどういう生活をしているのかよくわかった。同時に日本人たちが中国について北京、上海ぐらいしかイメージないんだとか、聞かれた時に自分が中国人であるとか、故郷には何があるのかとか、そこも意識するようになりましたね」。

王さんは「皆が責任感を持ち、他人に迷惑をかけないようにルールを守って暮らしている。だから街が綺麗だったり、経済が発展したんだと理解できた」。2人とも、この経験から、もっともっと色々な国を見てみたいと思ったと言う。

そうして中国に戻ると、とにかく周囲から「大人になった」と言われたと潘さん。家族から離れ、異国で能動的に問題を解決していったことが、大きな成長になった。これには王さんも「生活能力。特に時間とお金の計画的な使い方。それは今でもすごく役に立っています」と実感を入れて話していた。

20年経った今、王さんが一番思い出す光景は、特に仲の良かった同じ1期生2人とおしゃべりしながら道を歩いていた時間。「今日は日本人とこんな話をしたよって、お互いの体験を話して。あの日々ですごく戻りたい気がします」。すかさず潘さんが

「確かに。もう青春だったな…」と遠い目をしながら、「夕日を眺めながら川沿いを歩いて、クラスメートと一緒に唐揚げ食べたり。今思い出すとすごく良かった」と笑みをこぼした。ちなみに、好きな日本語について聞くと、ちょっと考えた後に王さんは「青春。すごくパワーのある発音」、潘さんは「思いやり」を挙げてくれた。

本プログラムの意義については「大学はともかく、高校の留学情報は個人ではなかなかわからないし選べないので、住むところを含めてすごく安心できる」と潘さん。王さんも「言葉の部分も2、3か月くらいからわかってくるので、短期では足りない。1年行けるのはとても良い」と続けた。

ちなみに本プログラムで留学中の中国の高校生から「日本の高校生とどうやったら仲良くなれるのか心配」という意見がよく寄せられるそう。これに王さんは、「基本的には時間が解決するけれど、中国のことだったり色々な情報をシェアしたり、相手の話もよく聞くことかな」とアドバイス。潘さんは「あと部活とか、一緒に何かをやるといいよね。練習して、その後一緒にお風呂に入ったらもう完璧」と笑わせた。

2人とも、「チャンスがあれば絶対行ったほうがいい。どんどん飛び込んで交流して。ガッツリ日本を体験して」とエールを送った。

今後日中関係のイベントや仕事などへの関わりについては、王さんは「やってみたい。日本の良い商品、中国の良い原料とか、相互に紹介してみたい」となかなか具体的。潘さんも「今も仕事で交流がありますし、文化イベントとかも好き。参加したいです」と話してくれた。2人の活躍のステージは、まだまだ広がっていきそうだ。

取材・文・写真：Whenever
取材日：2025年9月21日





心連心サポーターと第17期生

修了生それぞれの歩み

修了生による自主サポート

～現役生の留学を伴走する「心連心サポーター」～

心連心：中国高校生長期招へい事業の修了生でもある「心連心サポーター」は、毎月のオンライン面談や研修を通じて、招へい生たちの身近な理解者となり留学生生活をサポートしてくれています。

本プログラムに参加して日本を初体験した中国人高校生は約472名。そのうちの約5割が帰国後、日本に進学・就職しています。現役生にとって心強いのは、留学生生活を伴走してくれるこれらの「心連心サポーター」の存在です。何か困ったことや分からないことがあれば気軽に相談に応じ、日本での生活に対する心構えや助言をしてくれます。

2025年9月、今年も第17期の中国人高校生が羽田空港に降り立ちました。これから全国各地の高校に散らばり、約1年の留学生生活が始まりますが、その前にオリエンテーションを兼ねた4泊5日の「来

日研修」が、東京・四谷の国際交流基金本部で行なわれました。来日研修では心連心サポーターの孫逸馳さん、李心怡さん(第13期生)、陳儀さん(第14期生)が駆け付け、留学当時は懐かしく振り返りながら、自身の体験を踏まえたエールで後輩の門出を祝ってくれました。研修最終日には「対面式」が行われ、生徒たちは迎えに来てくださった受入校の先生や関係者に連れられて、期待と不安を胸にそれぞれの場所へと旅立っていきました。こうして無事に全員の生徒たちがそれぞれの生活地で、待ちに待った日本生活を開始しました。



第13期生
孫逸馳さん



第14期生
陳儀さん



第13期生
李心怡さん



出発前の北京杜行会にも修了生たちが駆けつけてくれました



日本留学体験記を出版



第12期生
趙一青さん

留学生活の日記をもとにした日本留学体験記を中国で自费出版しました。『16歳、我在日本：小留学生日記』（16歳、私は日本にいた：小さな留学生の日記）、あとがきに付けたタイトルは「没有一事情是没有意义的」（無駄なことは何一つない）です。最初、日本のクラスメイトが部活で一生懸命になっている姿を見て、大学受験に役に立つのかと不思議でした。私も『家康行列』に参加しなければ、単語がもっと覚えられたのに、と思うことも……。でも茶道には「一期一会」という心得があつて、一生に一度だけの機会をととても大切にしています。その時だけの経験が積み重なって、今の私があります。時には失敗したり、後悔したりすることもあるけど、振り返ればそれも決して無駄ではないと思うようになりました。これからも自分自身に言い聞かせたいし、若い読者にも伝わればいいなと思います。

1人の「後悔しない冒険家」として

第11期生
孫瑞雪さん



このプログラムが私にもたらした最大の変化、それは自身の性格面でした。留学が終了した後に書いた感想文の中にも、「子どもが時の流れを長く感じる理由は、毎日新しい物事に会っているからであり、大人が時の流れを早く感じる理由は、いつものと変わらない時間が多すぎるからです」という一節があります。交換留学の時間が限られていることを理解していた私は、今の一日一日が唯一無二かつ新鮮でかけがえのない時間なのだ自分に言い聞かせながら、新しい物事に積極的にチャレンジし、毎日をできるだけ充実させようとしていました。その習慣は、今もなお続いています。これからも一人の「後悔しない冒険家」として、一つひとつの出会いを大切に、巡り合わせに感謝しつつ、自分自身へのチャレンジを続けていきたいです。



「国を繋ぐ架け橋」になるために

第10期生
李顔秀さん

留学の一年間でたくさんの人に出会い、たくさんの方にチャレンジすることができました。そこから6年が経ち、今の自分は、高校時代より前向きになった気がします。なぜなら、「自分のできたこと」と「自分のできること」に目を向けるようになったからです。この何年間で、ようやく人を助ける側に回れるようになりました。そんな時に、私が思い出すのは三重高等学校の恩師である秦先生の言葉です。「若い頃に周りから優しく接してもらったら、大人になってからあなたのような若者に優しく接してあげるとよい」と。「国を繋ぐ架け橋になる」という言葉を口にする、自分には大きな使命が課せられたように感じるかもしれませんが、私はまず、自分のことから始めたいと思います。



「心連心サポーター」として後輩をサポート

第14期生
王籽陸さん

心連心サポーターとして関わった第15期、16期生の皆さんの留学生生活を振り返ると、それぞれが持つ独自の成長軌跡に深い感銘を受けています。帰国直後の今、皆さんの心の中には様々な感情が交わっているでしょう。日本での生活は、単なる語学習得の場ではなく、人格形成の重要な転換点であったと確信しています。初期の困惑や孤独感から始まり、徐々に環境に適応し、最終的には成熟な人として自立していく過程を目の当たりにしました。11か月間で培われた異文化理解能力と適応力は、今後のグローバル社会での活躍において計り知れない価値を持っていると思います。また、日本語能力の向上は表面的な成果に過ぎず、真の収穫は多様性への寛容性と柔軟な思考力の獲得です。後輩たちの未来への挑戦を心から応援しています。この貴重な経験を糧として、それぞれの道で活躍されることを期待しています！



心連心：中国高校生長期招へい事業修了生から17期生へ



2025年9月に第17期生が来日し、様々な課題に直面しています。
そこで心連心：中国高校生長期招へい事業修了生から
アドバイスをいただきました！

Q どうしたら日本の友達を作ることができますか？

- 会話で素直でポジティブな言葉を使う：おいしい！すごい！かわいい！きれい！頑張ったね！みたいな
- 気の合う友達は必ずしも同じクラスにいないとは限らない、学級の違う子たちにも接してみよう
- 周りの環境に合わせすぎず、自我を捨てず、しっかり自分らしさを保ちましょう。趣味の合う友達はそのうちできます。気長に待ちましょう
- 積極的に話しかけます。まず毎日の挨拶から始めましょう。席の周りの人とか、同じ電車に乗る人とか。クラスの人、部活の人たちと話して、同じ趣味を持つ人を探すのは大切です。その後は、中国の友達と同じように、日本人の友達と日常会話ができます
- まず全員の名前を覚えてください！話す時に相手の名前を呼ぶと彼らは喜ぶ！



Q 「古典」や「日本史」が苦手です。苦手な科目はどのように勉強、克服しましたか？

- 日本語の基礎が十分でない場合、特に古典という科目は大変です。私も当時はあまり上手く学べておらず、暗記テストではよく間違えていました。でも学校の先生は私に厳しくなかったのも、何とか乗り切りました
- 教科書を何度も何度も読みました。声を出して読むといいと思います
- 古典が好きな友達にどのように勉強しているかを聞いて、彼らの勉強方法を学びます
- 点数を無視した方が一番効く。30点万歳！
- 誰にでも得意な学科と不得意な学科があります。あなたが日本に来た目的は、全ての科目で満点を取るのではなく、この学習の過程を楽しむことです



Q これだけは後輩たちに伝えておきたい！と思うことを自由に書いてください

- 辛い時は隠さず辛いってちゃんと言おう。JFのスタッフの皆さんにも頼りましょう。抱え込みだけはやめましょう。みなさん十分頑張ってます。無理だけは絶対にしないように、体に気をつけて、スクールライフを楽しんでください
- 孤独や困難を経験した後に、想像以上の成長が得られるものです。留学での出会いも、一つ一つの活動も大切に、心を込めて友人を作り、生活を体験してください
- これから楽しくて新鮮な経験がいっぱいできる一方、辛いこともたくさんあると思う。それも成長への大切な一歩なので、恐れずに一步一步をしっかりと歩み出せばいいのだ。どの方向へでも、前進だから
- ただただ大切に大切に！私にとってあまりにも素晴らしすぎて、後で思い返すたびに夢のようだと感じるから後悔のない毎日を過ごそう！そして出会うすべての人に誠実に向き合おう
- 振り返ってみると、この一年間で「経験したこと、出会った人、直面した困難等々」は、高校時代および、今までの人生を含めて輝かしいものであった。目先の困難（友達をつくれぬ、勉強が大変）に囚われないように、思い切って「現在」を楽しんでください！そして、いつか当時、全力で楽しんだ自分に感謝する日が必ず来ると、私は信じている

Interview

楽しい時期も辛い時期も、一番近くで励まし、そして助けてくれたのは受入校の先生方、友達、ホストファミリーの方々です。お世話になったみなさまに、学生を受入れた感想をお伺いしました。

ホストファミリー

原岡 信子 さん 喜多 秀哉 さん 親子
(佐賀県佐賀市) (佐賀県神埼市)



留学中の高校生たちに宿泊や生活の場を提供し、日本における親代わりとなって身のまわりのサポートを行ない、民間における文化交流の拠点となるのがホストファミリーです。今回は長年ホストファミリーとして本プログラムを支えてくださっている原岡さん・喜多さんにお話を伺いました。

受入実績	長期	短期
	劉浩翔さん (9期) 禹林強さん (12期)	劉雯珊さん (12期) 梁天榮さん (12期) 舒子楨さん (16期) 念梓辰さん (16期)

流暢な日本語、言葉の心配は無用です

● 高校生を受け入れた経緯は？

喜多 中国高校生の受入校（龍谷高等学校）の教頭（当時）をしていたこともあり、JFから相談がありました。もとより私は、若いころから地域イベントのバルーン（熱気球）フェスタのボランティアとして海外チームのお世話をしたり、ヨーロッパからのクルーを家に泊めたりしていたので、海外からお子さんを受け入れることには全く抵抗がなく、二つ返事でお引き受けしました。

● 言葉の問題は？

原岡 わたしは英語も、ドイツ語も、もちろん中国語も全くダメですよ。でも、バルーン仲間を泊めた経験から、言葉が通じなくてもこちらが誠心誠意相手と向き合えば必ず応えてくれることが分かっていました。ましてや、中国高校生はみな来日前に、日本の高校の授業を普通に理解できるくらいに日本語に習熟しているんです。禹君（12期）や念君（16期）に至っては、こちらの冗談に冗談で返してきまされたから、問題ありませんでした。

「おばあちゃん、ただいま〜っ」

● 特に準備したことは？



喜多 一切ありません。家がお寺ということもあり住空間にはゆとりがあり、最初に受け入れた劉君（9期）にはそこで一年間暮らしてもらいました。リビングにはWiFiもありましたし、学校になじめないのではないかと、いじめにあわないかと、そういう心配も皆無でした。彼らは日本の高校生とはすぐに打ち解けて、部活や体育祭にもすすんで参加。1年後に帰国するときは、お互い涙を流していましたよ。中国での厳しい選抜試験をパスした子どもたちはみないい子ですし、この機に日本語をマスターしようと一生懸命です。目指す

ところが高いんですね。進学や就職の目安となる「日本語能力試験」に受かろうと、片時も辞書を手離さないような子ばかりでした。

● 印象的なエピソードは？

原岡 近所の人から「外国人を受け入れて大変じゃないですか」とよく言われましたが、わたしにとっては日常の生活の延長です。お国の違いとか、生活習慣のギャップとか、とにかく違和感を覚えるような出来事はまったくなかったですね。短期で2度ホームステイした念君（16期）なんか、2回目に来たとき、車から降りて一言目が「おばあちゃん、ただいま」ですから。もう家族とおなじ。身内が増えたようなもので本当に楽しかった。若い人と一緒にいることでこちらも元気をもらえました。



日本の伝統が残っている、田舎がいいかも

● 本プログラムに、何かアドバイスは？

喜多 近年はホストファミリーが少なくなったのか、学校側で受け入れ寮生活を送るケースが多くなったと聞きます。でも、できれば家庭で受け入れて、日本の文化や生活習慣、日本の家族の温かみというものに触れてほしいですね。家のお寺の行事、もちつき、除夜の鐘つきなど、日本の伝統的なものを体験させてあげられた。田舎に行けば行くほど、風習とかお祭りが残っているからいいかもしれませんね。劉君は帰国後、阪大に入学し、それから東大の大学院に入り、2年ほど前に日本IBMに就職しました。とにかく優秀なんです。彼らとは今でもときどきオンライン電話で話をしますし、日本に来たら必ず寄ってくれます。これまで短期を含めて6人程お世話しましたが、また是非我が家に来てほしいし、ホストファミリーの募集があれば手を挙げたいと思っています。

取材日：2025年7月28日

日本側受入校

三重高等学校 秦雅文 先生

三重高等学校には「心連心：中国高校生長期招へい事業」第6期から受入いただき、これまで計11名受入れていただいています。長年本プログラムの学生をご担当いただいている秦先生からご寄稿いただきました。

コロナ禍は国際交流に大きな影響を与えた。これを機に情報機器が社会に浸透し、オンライン交流が日常的になったという肯定的な側面があるものの、コロナ禍は機会を奪い、留学を志す者にづらい選択を迫った。夢を持ち努力してきた若者が突然人生の転換を余儀なくされた辛さはいかばかりであったかと今なお心が痛む。来日して大学進学に励んだ若



者にもその影響は大きかった。感染予防のため直接の接触を避ける社会で、寄るべき知人のいない中国籍の若者に手を差し伸べる者は見当たらなかった。辛い記憶だけが残った2020年春であった。

かつての留学生、^{いっせけん}尹一茜も例外ではなかった。中国高校生長期招へい事業第12期生の彼女は、大学受験のために再来日していた。連絡があり、消息を尋ねると、合格に伴い予備校から退寮を迫られているが、どうしたらいいかわからないとのことであった。部屋の借り方が分からない。保証人を引き受ける人がいるはずもない。電気や水道の契約が必要なことも知らない。家具や電化製品を買おうにも自分

では運べず、配達も期待できなかった。カーテンを買おうにも窓を測るメジャーすらなかった。コロナ禍で親は来日できず、いきなり社会に放り出されたのだった。彼女が頼れるのは16歳の時に会った私だけであった。苦勞を引き受けたとは思わなかった。忘れずに頼ってくれたのが嬉しかった。しかし、その後の日々は並大抵ではなかった。保証人に

なり、何度も印鑑を押した。大型家電や家具を買おうにも配達は5月になりますと断られ、洗濯機などは我が家からトラックで運び込んだ。手ごろなベッドや本棚は売り切れていた。意を決して、古い木工工具を引っ張り出し、部屋に合わせて図面を引き、大きなものを製作した。あの時、私は娘を想う父親であった。

純粹で真っすぐな16歳の出会いは強い記憶となり、いつまでも心に深く残る。心連心が求めたのは、まさにこうした絆ではなかったか。16歳の記憶に強く残る経験を持ち帰りたい、私は今もそう思っている。

文化用品・図書寄贈事業

国際交流基金では対日理解促進のため、これまで心連心：中国高校生長期招へい事業に招へい生を派遣して下さった中国の高校へ、2020年度に日本関係図書の寄贈、2021年度には日中国交正常化50周年を記念し、着物や浴衣、ひな人形、こいのぼり、かるた、茶道具などの日本文化用品を寄贈しました。

各地の中国ふれあいの場に対しては、事業で利用可能な文化用品や日本の図書を寄贈しているほか、日本で発行されている雑誌を毎月購送しています。



中国をもっと知るための

訪中事業

中国への理解をより深めるために、公益財団法人かめのり財団との共催で「日本高校生短期訪中事業」、中華人民共和国駐日本国大使館との共催で「日本高校校長等訪中事業」「ホストファミリー訪中事業」を行っています。

日本高校生短期訪中事業

国際交流や中国に関心を持つ日本の高校生を約1週間中国に派遣し、中国の高校生や大学生たちとの交流活動や学校訪問、一般家庭でのホームステイ体験を行いました。学校訪問では書道や伝統音楽の体験のほか、日本語や英語の授業も見学し、またホームステイ先で手厚い歓迎を受けた日本の高校生からは「中国こそおもてなしの国だ」という感想もありました。他にも現地のふれあいの場への訪問、各地の名所旧跡の見学を行い、日本国内の報道や一般的な旅行だけでは知ることのできない“生”の中国を、自身の目で見て感じることができました。



ホストファミリー訪中事業



中国高校生の日本留学中、長い方では10年以上という長期間にわたり受け入れてくださっているホストファミリーの皆さんが、2017年に北京・天津を訪問しました。万里の長城などの名所旧跡はもちろん、中国高校生らの母校の一つである天津外国語大学付属外国語学校も訪問しました。またプログラム修了生が中国各地から駆け付け、日本でもともに過ごした修了生との再会を果たしました。

日本高校校長等訪中事業

日本と中国の学校間交流の促進を目的に、2018年、2019年、2024年の計3回実施しました。高校生の受け入れに長年ご協力いただいている受入校の校長先生が中国を訪れ、日本語教育の現場訪問や、プログラム修了生との交流、世界遺産の視察などを通して中国を肌で感じていただきました。



心連心：中国高校生長期招へい事業 1期～16期の修了生に聞きました！

Q1 本プログラムで留学中、好きだった科目は何ですか？

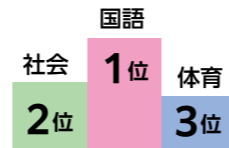


日本の古文を勉強するのは初めてなので、新鮮な感じがしました。あと日本語で中国の漢文を勉強するのも面白かったです

理科の勉強は問題集をやるだけでなく、生活の実際の問題を解決するための科目であるとわかりました

日本の高校生の視点から日本の政治や経済などを分析するのがおもしろい

Q2 本プログラムで留学中、苦手だった科目は何ですか？



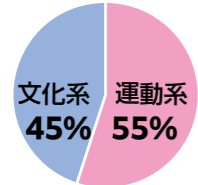
古文。新しい言語を勉強しているみたいだった

歴史です。世界史でも、日本史でも、人の名前、時代、地名を暗記するのは一番大変です

世界史です。とにかくカタカナが大変でした(笑)

体育です。当時はあまりにも勉強中心で体を鍛えることを疎かにして、日本の生徒の平均に追いつくのに精いっぱいでした

Q3 本プログラムで留学中、部活は何部に所属していましたか？

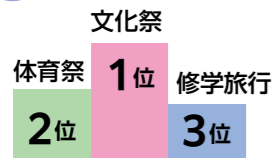


● 運動系：バスケ部、剣道部、卓球部、弓道部、サッカー部など

● 文化系：美術部、音楽部、演劇部、茶道部、華道部など



Q4 本プログラムで留学中、好きだった日本の学校行事は何ですか？



文化祭です。中国では体験できない、日本の高校の特有の行事だと思います。クラスみんなで一つのテーマを決めて、一緒に努力するのは青春感を感じました

体育祭は本当に素晴らしかったです。みんなと一緒に頑張って準備する日々はすごく楽しかったです。自分がいる紫団も優勝をとりました

Q5 本プログラムで留学中、一番辛かったことは何ですか？

ホームステイ先の生活に慣れる過程だったと思います。初めは日本語があまり上手ではなかったので、自分の考えをうまく伝えられず、良好なコミュニケーションが取れないこともありました。それに、見知らぬ人の家に住むことになり、生活習慣も調整が必要で、完全に自分の家のように振る舞えるわけではなかったので、時々理解されずに落ち込むこともありました。ですから、良好なコミュニケーションが非常に重要だと感じています

一緒に生活していたルームメイトと仲良く付き合えなかった

友達ができるまでの間、週末は家に籠らず、遊びに出ようホストファミリーから言われたが、行くあてがほとんどなく、近くの公園や博物館等をひたすらぶらぶらしていた時期もありました

日本語が理解できない時と考え方が違う時。辛かったのは友達が話している時、私は聞き取れず、どうしたらいいのかわからない時がありました。またこれまで日本人と全く違う場所で生活していて、異文化の影響で私たちの考え方や価値観が時々違うことがあります。最初は困りましたが、私は学びと成長のチャンスだと考えて、積極的に理解しようと努力しました

Q6 本プログラムを通じて、どんなところが一番成長したと思いますか？

留学する前は自己中心だったが、学校で出会った優しい人と付き合う中、他人の気持ちを配慮できるようになった

視野を広げ、自分は何のために勉強しているのか、将来どんな人になりたいのかを明確にしたところ

思いやり、自己反省、一期一会の大切さ

時間管理能力と周りの人に対する感謝の気持ちを身につけた

Q7 本プログラムに参加して良かったことは何ですか？

青春を勉強のみに費やしてはもったいない。文化が違う人と交流したり、新しい活動に挑戦したりして、中国の高校で想像できないカラフルな生活を送ったことがよかった

自分の性格を作り直して、より外向的になりました。人間性も高め、周りの人への思いやりも増えてきました

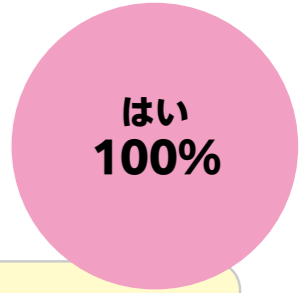
このプログラムは私に非常に大きな影響を与えました。今でもあの時選ばれたことが本当に幸運だったと感じており、誇張ではなく、まさに人生の転機だったと言えるでしょう！帰国後は自分が何を望んでいるのかが明確になり、同時に自分自身を理解し始め、将来どんな人生を送りたいのかを考えるようになりました。また、より積極的に学ぶ姿勢も身につけることができました

異文化での生活を通じて、一人で困難を解決する力が身につき、自信が得られました。そして日本人の友達とホストファミリーと深い交流をして、日常生活を通じて、お互いに理解しました。これは何よりの宝物です



Q8 もし高校生に戻ったら、もう一度本プログラムに参加したいですか？

プログラムのおかげで、以前は想像もつかなかった楽しい一年間を過ごせました。留学生活を通じて、コミュニケーション能力や、人間性も高めることができ、今まで体験できなかったこともいっぱい体験して、新しい人生を味わうことができました。このプログラムは私に今までなかった勇気を与えてくれました。より一層自分の青春を楽しめたと感じます



本当に貴重でかけがえのない経験であり、私の人生における最大の転機となりました。日本へ行くために世界中から集まった仲間たちと出会えたこと、日本での生活の細やかな体験、JFのスタッフの皆さん、日本のホストファミリー、先生、友人、皆から数えきれないほどの善意と助けを受け取り、日本語も大きく上達しました。帰国後は考え方や性格が大きく変わり、思考の仕方にも変化が表れています。何度でも、私は迷わず参加するでしょう。これは私が下した最も正しい決断でした

自分は一人っ子で家族から甘やかされて育ちました。新しい環境で違う文化や生き方に触れ、自分の今までの生き方・考え方の甘さに気付かされ、一人の人間としての生き方についてあたらめて考えさせられました。その経験がなければ、今の自分はいないと思いますし、大学では教育学についても学んでいますが、留学の経験は日本の教育について知る機会となり、自分が今科学教育という学問に興味を持った原点となりました

はい、迷わず参加したいです。高校一年生に戻るのにはありえないですが、私はこのプログラムに参加することを決めて、一度も後悔したことはありません。日本の高校で勉強し、日本人の友達ができ、日本人の家庭で一年間生活し、一人前の高校生になりました。この一年の経験はずっと忘れません。この一年間の経験をもって、自信が得られて、将来も自分の夢のために努力し続けます



日中高校生対話・協働プログラム

対話と協働を通じて、日中高校生の絆をはぐくむ

日中高校生の相互理解を促進するプログラムとして2020年度から開始しています。このプログラムは、日本と中国の高校生が教諭の指導の下、お互いの文化や社会についてオンライン交流を行うもので、これまでに延べ 2,400 名を超える高校生が参加しています。

現代文化・地域文化紹介

日中の高校生が同時代の文化や地域文化を調査し、互いの現代社会・文化を紹介する。

将来・キャリア探求

「将来の夢」をテーマとしたプレゼンテーションなどを通じ、将来の夢や進路を考える。

共同制作

アート、動画、写真等、テーマを決めて日本と中国の学生が共同制作を行う。

パンダとSDGsがつなぐ日中交流

和歌山県立橋本高等学校 - 成都外国語学校 (2021年度)

「学校紹介」「日本と中国のパンダとSDGsについて」「日本と中国の正月」「地元ならではの食べ物」について計4回交流を行いました。日本の高校生からは「普段交流することのできない中国の方たちと様々な話をする事ができ、とてもいい経験になりました。友好的な方たちばかりでどの回も楽しく過ごすことができました。」と感想が寄せられました。



自国の学校生活や文化について学び合う

埼玉県立蕨高等学校 - 済南外国語学校 (2023年度)



「自国の学校生活や文化について学び合う」、「将来の夢や就きたい職業についての意見交換をする」をテーマに計2回交流を行いました。生徒たちからは中国と日本との共通点や相違点、価値観、積極的にコミュニケーションを取ろうとする大切さなどを学んだ、中国語で会話することの楽しさがわかったなどと感想が寄せられました。

日中の若者文化と伝統文化について

横須賀総合高等学校 - 福州外国語学校 (2024年度)

「学校と地域文化の紹介」「日中の高校生の違い」「日中の若者文化と伝統文化について」をテーマに計3回交流を行いました。担当教員から「最初にインターネットで繋がった瞬間に『わー!』という歓声が上がリ、教師も生徒も感動を覚えました。繋がることの喜びは万国共通のようです。インターネットの普及によりグローバル化は加速しています。現地に行かなくても、見たり、聞いたりすることで国際理解が深まり、国際的な視野を広げることが可能であると実感しました」と感想を寄せられました。



オンラインで国境を越えて

よこた きやか
横田 爽花 さん
東京学芸大学附属
国際中等教育学校



私は北京市月壇中学とのオンライン交流「君の街は。你的城市。One-Day Trip をプロデュース!」(2021年度)に参加しました。以前、課外活動で国際交流イベントを企画・運営した経験がありましたが、オンライン交流の「壁」を身をもって感じました。その経験からこの課題を解決したいと思い、このプログラムに参加しました。東京のOne-Day Tripでは月壇中学の学生に説明するために、訪れた場所を詳しく調べ、日本の歴史や文化をさらに深く知る機会になりました。計4回の交流会を通してたくさんの学びを得ることができました。オンラインで実際に会ったこともない、距離が離れた場所からの交流でも距離を縮めることは可能です。そのためには、緊張するかもしれませんが、少し冒険して面白い話題をふってみることも重要だと思います。たくさんの時間をかけて行ったメンバーとのミーティングや準備を通して、個人・グループにおいても成長することができました。また今度北京月壇中学校の生徒と交流がしたいと心から思う国際交流でした。いつかオフラインで会えることも楽しみにしています。

富士山にツバキの花を咲かせよう

こう かぶん
洪 嘉雯 さん
福州外国語大学



横須賀市立横須賀総合高等学校とのオンライン交流会(2021年度)に参加し、これまでにない角度から世界を見るきっかけになりました。緊張感のある教室をしばし抜け出し、海を隔てた国の生活をモニター越しに垣間見ることができたのです。日本の高校生との交流において、異なる文化の裏に隠れた考え方の違いに触れることで、日本の文化や風習について理解を深め、物事に対する視野が広がりました。両国の青少年交流活動では、私たちの一挙手一投足が国のイメージにつながります。交流の中で日本の生徒と協調し、尊重し合えば、お互いの心の中に温かい愛の種を植えることができるのではないのでしょうか。人によって皮膚の色や言葉の違いがあったとしても、そして文明によって特色の違いがあったとしても、それは優劣の差を示すものではありません。絵を描く時に、違う色の絵の具を混ぜ合わせながら、幻想的で鮮やかな作品に仕上げるのと同じように、異なる文化を持つ人たちが世界で出会えば、富士山にツバキの花を咲かせるかのごとく、調和の取れた美が生まれることなのでしょう。

オンライン交流会に参加して

こう か
黄華 先生

黄岡市外国語学校
(2023年4月湖北省黄州中学に改名)

高知県立高知東高等学校と2年間オンライン交流活動を実施
2021年度「日中の環境問題について」
2022年度「日本・中国お国自慢!(互いのよいところを見つけよう!)」



● **高知東高校とのオンライン交流会はいかがですか?**
黄先生: 高知東高校の尾崎先生が尽力してくださったおかげで、とてもスムーズに交流できました。毎回約20名の生徒が参加しています。交流会では、生徒たちが興味のある身近なテーマを選び、日本と中国それぞれのグループごとに発表しあい、最後に質疑応答をします。いつも話が盛り上がり、時間が足りないくらいです。発表テーマは、中国側は学校の生活や地方の有名な料理、観光地などが多く、日本側は日本料理やお薦めの漫画、本などを紹介してくれました。なかには日本のネイルについての発表もあって、中国の生徒たちはみんなびっくりしました。
● **オンライン交流会のほか、WeChatでの交流もあったとうかがいました。**
黄先生: 交流会が最初からとても盛り上がり、生徒同士でWeChatの連絡先を交換することになったのです。その後、生徒間で個人的な交流も続いているようです。日本の生徒が

WeChatに普段の生活の様子を投稿してくるので、中国の生徒たちはそうした書き込みを通じて、リアルな今の日本に触れる機会も増えました。
● **オンライン交流会を通して、生徒にどのようなことを学んでほしいですか?**
黄先生: 外国語を学ぶというのは、他の国の人と交流し、その国の文化を直接体験することができる、とてもよいチャンスだと思います。特にオンライン交流会では、同じ年ごろの日本の生徒と交流することができます。これはとてもすばらしくて、私が授業ではなかなか伝えられないことも、生徒同士で話をするとすぐに理解できます。このような交流を通して、生徒はもっと日本に興味をもつようになります。将来的に留学なども視野に入れて、さらに深く日本語を学んでほしいと思っています。日本語というのは、やはり日本文化につながっていますから、生徒には言葉だけでなく、日本文化のいろいろなよい面を学んでほしいと思っています。

中国ふれあいの場事業

日本人や日本の情報に接する機会が少ない中国の地方都市において、青少年層を主な対象に、対日理解と交流を促進する「ふれあいの場」を開設しています。

「ふれあいの場」では、日本の最新情報（雑誌、書籍、映像資料等）に触れることができるほか、日本の大学生・留学生や在留邦人、現地中国人の協力を得て、さまざまな日中交流イベントが行われています。

中国側機関（大学や図書館等）が主催機関として「ふれあいの場」の施設の提供や日常の運営・管理と活動の企画実施を行い、国際交流基金では日本紹介コンテンツの提供と日中交流イベントの開催を支援しています。また、各「ふれあいの場」に、その魅力をご紹介いただきました。



ふれあいの場 活動紹介

ふれあいの場では、日本文化に関するさまざまなイベントを企画し実施しています。

済南ふれあいの場 寿司作りイベント 2024年10月実施

済南ふれあいの場で寿司作りイベントを開催しました。先生が巻き寿司のデモンストレーションを行い、学生たちは真剣にその様子を見て学びました。その後、自分で実際に寿司を作り、完成後は皆で記念撮影を行い、先生と共に美味しい寿

司を味わいました。今回のイベントを通じて寿司作りの方法を学び、美味しい寿司を味わうことができました。同時に、皆が日本の食文化に対する理解を深め、日本文化の学習意欲を高めることができました。



南昌ふれあいの場 茶道体験イベント 2023年4月実施



南昌・高松中日友好会館で「茶道体験イベント」が行われました。茶道専門講師が、日本茶道の起源や発展・礼儀作法などを紹介し、抹茶の点て方を教えてくれました。南昌市復興外国語学校の中学生

60名が参加しました。講師の指導のもと、学生たちが楽しく抹茶を点ててみました。日本の茶文化について知ることができました。

重慶ふれあいの場 だるま絵付けイベント 2023年11月実施

重慶ふれあいの場でだるま絵付けイベントが開催されました。事前にネット上で絵付けに必要な石膏と絵の具を買って、イベント当日はだるまについての基本的な理解をしてから本格的な絵付けを始めまし

た。みんなは自分の考え方やアイデアを持って創作をはじめ、みんなが絵付けを楽しむことと日本のだるまについて学ぶことができました。今回のイベントは大成功でした。



日本企業文化紹介セミナー

専門家と高校生長期招へい事業の修了生がふれあいの場を巡回し、日本企業をテーマとしたセミナーを実施しています。



わん ゆえ
王 玥
さん

中国高校生招へい事業第3期生
2017年 株式会社ブリヂストンに入社

2019年12月に中国ふれあいの場を訪問し、セミナーの講師をしました。セミナーでは日本の就職活動のスケジュールと方法、日中企業の比較を主要なトピックとして、自分がどのように就活をしたか、試験や面接で感じた大事なポイント、そして今の社会人生活で感じている日本企業の特徴等、主に自分の実体験の内容を強調して話をしました。日中交流について改めてグローバル、経済、教育等、多

様な観点から考えさせられ、日中交流の可能性、そして私たちができることはまだまだ沢山あると強く思いました。そして中国高校生長期招へい事業の修了生として、自分の故郷で自分の経験を学生に伝えられる機会を頂けたことが何よりもうれしく、心より感謝しています。今後も初心を忘れずに、一社会人として微力ながらも、日中交流に協力、貢献できたいなと思っています。

日本文化セミナー

ふれあいの場を利用する学生たちの関心が高い日本文化に関して、専門家を招きオンラインまたは対面でセミナーを実施しています。

声優

日中2か国語声優の私が辿った外国語学習の道

講師：劉 セイラ 氏 (声優・漫画家)

開催日：2021年10月27日 共催：ハルビンふれあいの場

日中2か国語声優の劉セイラさんを講師にお招きし、オンラインでのセミナーを実施しました。劉さんの日本語学習のご経験や、声優になる夢を叶えた後のことなど、多彩な内容についてお話をいただきました。



日本料理

日本料理と食文化について -おせち料理-

講師：おおはし なおこ 氏

(和素材レシピ研究家・国際薬膳食育士・フードコーディネーター)

開催日：2022年3月8日 共催：西寧ふれあいの場、フフホトふれあいの場

セミナーでは薬膳の知識も取り入れながら、家庭でも作りやすい伊達巻、なます、ごまめ、栗さんとんの4品を調理し、重箱への盛り付けまで実演しました。ふれあいの場の学生からは、「重箱に入れる品数は偶数か奇数か?」という質問や「今度家族におせちを作りたい」といった感想がありました。



観光

「山々に抱かれた健康長寿県・長野県の観光について学ぼう ～長野でりんご狩りと温泉旅館バーチャルツアー～」

開催日：2022年11月22日 共催：貴陽ふれあいの場、桂林ふれあいの場

協力：長野県観光機構、有田屋旅館、中島農園、千曲市、信州千曲観光局

セミナーのオープニングでは、野外ステージから和太鼓の演奏をお届けし、長野県のPRキャラクター「アルクマ」も登場しました。セミナーは3部構成で進められ、りんごの収穫体験の様子や温泉旅館の紹介を行いました。



文学創作

ショートショート of 書き方講座

講師：田丸 雅智 氏 (ショートショート作家)

開催日：2024年10月27～31日 共催：在上海日本国総領事館、杭州外国語学校、杭州ふれあいの場、貴陽ふれあいの場、広州ふれあいの場

セミナーでは、ワークシートに沿って思い思いの名詞と、その名詞から連想する言葉を書き出し、別の言葉同士を組み合わせることで「不思議な言葉」を作り、そこから物語を創作しました。ご飯の王様とカレーの王様がしのぎを削る「カレーに満ちた世界」や、話ができるようになった桜が開花の予想を語る「未来の桜前線予報」などユニークな作品がたくさん生まれました。



ふれあいの場 実務担当者会議

「中国ふれあいの場」で日常的な管理や運営を担当する職員を各都市から一堂に集め、活動や運営方法について情報交換し、「中国ふれあいの場」同士のネットワークを形成・強化する研修を行っています。

2024年度は新型コロナの影響によりオンラインで実施されていた時期を経て、5年ぶりに北京日本文化センターで開催しました。翌2025年はアモイふれあいの場のある廈門大学嘉庚学院にて、対面とオンラインのハイブリッド形式で行いました。各ふれあいの場か

らの活動報告やディスカッションが行われ、お互いの活動事例や課題を共有し、「ふれあいの場」同士の横の繋がりを深める貴重な機会となりました。



2025年 アモイふれあいの場



2024年 北京日本文化センター



広州ふれあいの場 徐愛紅 先生

中山大学外国语学院日本語学科准教授。専門は言語学。2016年より「広州ふれあいの場」の責任者を務める。留学時代には、日本人学生や各国の留学生と親しく交流し、ともに学業に励んだ日々を自身の人生の宝だと感じている。その経験から、「広州ふれあいの場」が中日青年交流の貴重なステージとしてあり続けることを願っている。

「広州ふれあいの場」は、2010年の設立以来、15年の歩みを重ねてきました。この交流の場は、1924年に孫文先生が創立した中山大学の構内にあり、キャンパスの中心に立つ銅像は、孫文先生を支援した日本の実業家・梅屋庄吉氏の寄付によって鑄造されたものです。こうした深い歴史的つながりが、中山大学と日本との交流の礎となっています。

「広州ふれあいの場」は、孫文先生が掲げた日中友好の精神を受け継ぎ、学生や日本文化愛好者が集う交流の拠点として活動を続けています。これまでの活動を振り返ると、多くの温かな出会いや感動の瞬間がよみがえります。

なかでも特に光栄に感じたのは、2016年9月に阿南惟茂・前駐中国日本大使をお迎えし、「日中文化交流の歴史と未来」をテーマに特別講演を賜ったことです。昨年、突然の訃報に接し、今もなお信じられない思いです。阿南前大使の温かい笑顔と、親しみやすいお人柄は、私たちの心に深く刻まれています。

2020年からのコロナ禍では対面での活動が難しくなり、新たな工夫が求められました。そこで、オンラインでの投稿イベント



阿南惟茂氏と中山大学外国语学院教職員一同の記念写真

- を企画し、日本の風物詩の考え方を取り入れて、
- 広州の「春の風物詩」「夏の風物詩」投稿コンクールなどを開催しました。
- さらに、俳句や和歌、四コマ漫画、ショートショート創作コンクールを通じて、学生たちに日本文化に親しみながら創造力を育む試みも行いました。これらの投稿イベントは、コロナ禍で停滞していたふれあいの場に再び活気をもたらしました。現在も「推し大会」「粵談東瀛（トークイベント）」「コウフレラジオ」など、広州ふれあいの場発の新しい企画が次々に生まれています。こうした活動を継続できたのは、国際交流基金のご支援、そして同じ夢を抱いて集まった学生たちの努力のおかげです。
- 若者こそが、未来の中日友好関係を築く担い手です。中日が隣人としてどのように良い関係を築くか、また国際的な課題をどのように協力して解決していくか——さまざまな交流を通じて、若者たちは思考の幅を広げ、知恵を出し合い、責任感を育んでいくことでしょう。
- 互いの文化を学び合い、自らの体験をもってそれを伝えていく「架け橋」として、広州ふれあいの場はこれからも使命感を胸に、努力を重ねていきたいと思っています。



広州ふれあいの場第二回落語大会

ふれあいの場を運営する学生たち

「中国ふれあいの場」の運営に携わり、さまざまな活動に参加した学生たち。活動から学んだことを胸に、日本と中国の架け橋として活躍中です。



おう こうてつ 王光哲 さん

黒龍江大学日本語学科に入学後、ハルビンふれあいの場の活動に参加。学生リーダーとなり、数多くの中日文化交流イベントを開催。大学卒業後は日系の航空会社に入社し、グランドスタッフとして働いている。

かけがえのない友がいれば、どこまでだって走れる

●ふれあいの場の活動について

私は小さい頃からずっと日本の特撮と邦ロックに興味を持ち、大学では日本語を専攻しようと思い、黒龍江大学日本語学科に入学しました。大学の先輩の紹介をきっかけにハルビンふれあいの場を知り、日本文化だけではなく、異文化交流そのものが興味深いと思い、活動への参加を決めました。活動中は新型コロナウイルスの世界的な流行により、中国と日本の学生たちの対面活動を行うことができなくなりましたが、皆で絵葉書を送り合ったり、オンライン交流会を開いたりするなど、さまざまなやり方で距離を縮め、交流を行いました。ふれあいの場の活動で一番大切にしていたものは、皆との出会いと絆だと思います。今まで知らなかった中国と日本の学生たちが出会い、交流を通じてお互いの国の文化を理解し合い、最後に友達になることができたのは、本当に素晴らしい体験だと思っています。両国間の文化交流の架け橋を築くという同じ目標に向けて企画や活動を準備するのは、私の大学生活の中で最も忘れがたい思い出です。むしろ、これは私の青春そのものだ

とも言えます。ハルビンふれあいの場のおかげで、皆さんと巡り合えたことに感謝します。そして、私もこの貴重な絆を永遠に続けたいです！

●卒業後について

現在、私は空港のグランドスタッフとして働いており、お客様と直接交流する仕事をしているので、自分の力でお客様の問題を解決できた時には、心からやりがいを感じられます。また、離陸する飛行機が空へ飛ぶ姿を見るたびに、チームワークの重要性と自分自身の仕事の価値を深く実感します。時々大きなプレッシャーを感じるがありますが、私はよくふれあいの場の活動を通じて知り合った友たちに相談します。そして、いつも再び困難に立ち向かう勇気が湧いてくるのです。一人ぼっちで未来へ進んでいるのではなく、ふれあいの場で知り合った友たちと一緒に成長しているのだと感じています。この絆はいつも、私が前へ進み続ける力となります。かけがえのない友がいれば、どこまでだって走り続けることができると、私は心から強く信じています。

心に残る「ふれあいの場」での出会い

高校時代に日本の舞台劇に強い興味を持ち、延辺大学日本語学科に入学。延辺ふれあいの場の学生リーダーとして様々な文化交流イベントに参加。現在は弘前大学大学院に留学中。



ま かく 馬赫 さん

●大学生交流事業への参加

延辺ふれあいの場での活動を振り返ると、いくつかの大規模なイベントに参加しました。最初は2019年北海道商科大学の「ゆきっこ娘。」との交流イベントで、ジンギスカン体験や足湯、浴衣体験などを行いました。2021年3月には愛知淑徳大学の「チームおもてなし」との交流イベントがオンラインで行われました。主な内容は恵方巻作りや和菓子の体験、名古屋の観光地紹介でした。私は立春に恵方巻を食べて豆を撒く習慣を初めて知りました。人生で初めて食べた恵方巻が自分で作ったもので、とても記念になりました。延辺には朝鮮族の美食があり、その中でも恵方巻に似た海苔巻きがあります。材料の比較を通じて文化の共通点と違いを体験しました。2021年9月には安田女子大学の「はたいっず」との交流イベントを担当しました。主な内容は広島焼き作りと紙芝居の展示でした。このイベントは私が担当した初めての大規模なもので、日本のパートナーとの交流から多くのことを学びました。オンラインイベントだ

けでしたが、その後、昨年の大学生交流事業参加者交流会で偶然にも日本で会うことができ、これも大きな縁でした。

●忘れられないふれあい

2022年、私はふれあいの場のリーダーを務めることになりました。後輩たちとの会話の中で、私はこう言いました。「ふれあいの場は私の大学生活をより有意義なものにしてくれた。ふれあいの場がなければ、私の大学生活はこんなに豊かなものではなかっただろう」。この言葉は私のある後輩にインスピレーションを与え、その後、その後輩はふれあいの場の新しいリーダーになりました。昨年の大学生交流事業参加者交流会で偶然日本で再会したとき、彼女はそのことを口にした。私はかつて自分が感じた気持ちが今でも他の人に影響を与えていることにとても感動しました。このような経験を通じて、ふれあいの場が私にとってどれほど大切な存在であるかを改めて感じています。これからも、中日文化交流の架け橋として、微力ながら貢献していきたいと思っています。

ふれあいの場運営ボランティアの学生に聞きました！

Q1 日本文化や日本語に興味を持ったきっかけは何ですか？

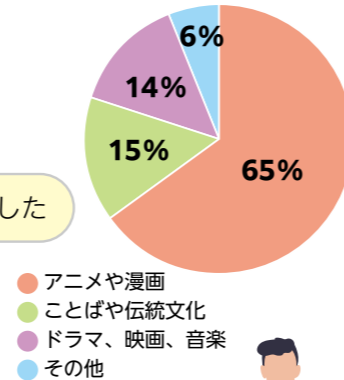
やっぱりナルトとかドラえもんなどのアニメやマンガの影響だと思います

中学生になると、アニメの主題歌をきっかけにJ-POPに興味を持つようになりました

日本語を勉強しているうちに、オノマトペの面白さを自然に感じて、だんだん日本語に興味を持つようになりました

日本の伝統文化、たとえば三味線や能など

小さい頃から、ずっと日本の特撮ヒーローが大好きです



Q2 日本語の勉強で難しいこと（文法、発音など）は何ですか？

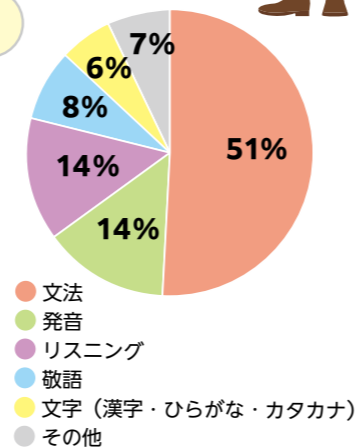
自然な言葉遣いが難しいです。漢語をたくさん使うと、表現は硬くなります

濁音。私は「が」と「か」の発音をよく聞き間違えてしまいます

外来語の暗記。カタカナがたくさんあります

日常でよく使われる言葉は教科書で勉強したものと違う感じがします

敬語の種類が多くて、生活と仕事に活用するのは大変です



Q3 ふれあいの場活動の魅力をお教えてください。

国籍や身分などを問わず、中日若者同士と一緒にイベントをすることが一番魅力的です

日常では知ることができないことを知ったり、新しいことを体験したりできる場所（すき焼き、うどんなど）

日本文化に触れる中で、自分の視野が大きく広がったと実感しています

「ふれあいの場」を通じて、日本の友達と交流する機会がより多く得られ、日本文化をより深く理解することができます

日本の雑誌と本を見ることができて、中国ではすごく珍しいと思う

ふれあいの場活動は、言語を学ぶ場であると同時に、人間関係を築き、自分自身を成長させるチャンスでもある

Q4 ふれあいの場活動に参加して良かったこと、得られたことは何ですか？

日本人との交流が良かったですし、自分は活動に参加することによって、日本語能力よりも、コミュニケーション能力やリーダーシップ、または異文化理解の柔軟性などを磨くことができたところが、とても良かったと思います。また、ほかのふれあいの場の学生たちとお友達になって、すごく貴重な思い出ができました

自分のコミュニケーション能力を高めることができるだけでなく、日本文化への理解をより深める機会となりました

日本の友達ができました。そして、照れずに日本語を話せるようになりました

ふれあいの場の活動に参加したことで、日本語の能力が上がっただけでなく、良い友達も増えて、異文化コミュニケーションに対する理解も深まりました

ふれあいの場のリーダーを務めて、研修で日本に行ったことがあります。その時、一生忘れない思い出を作りました。日本人の友達もできたとし、一緒に文化体験もできたとし、本当に面白かったです

Q5 これだけはふれあいの場の後輩たちに伝えたい！と思うことを自由に書いてください。

学生時代でこういうグローバルな事業に参加する機会はとても貴重だと思います。そんな貴重な機会を無駄にしないように、「今」を生きて、一期一会の気持ちで活動に参加すれば、きっと後悔のない素晴らしい経験が出来ると思います

正しい日本語より、「伝えたい」という気持ちを一番大切にしてください。この場は、教科書にはない、生きている日本語を学べる最高の先生です。そのチャンスを、どうぞ思い切り楽しんでください

「ふれあいの場」で過ごした3年間は、私の人生の中でも大切な思い出です。皆さんにも、ぜひこの機会を逃さず、思いきり楽しんでほしいです。若いうちにいろいろな国や地域の人と出会うことは、将来にとって本当に大きな力になります

ふれあいの場のイベントを楽しんでください！自分も成長できるし、大切な思い出もできる！

ふれあいの場はあたたかくて面白い場所です。ここではきっと意気投合した友達を作ることができ、視野を広げることができます

ふれあいの場が開催する活動に、ぜひ参加してください。ボランティアスタッフはみんな親切ですし、どの活動も心を込めて準備しています。参加される皆さんが楽しんで、素敵な思い出が作れることを願っています



ふれあいの場 学生代表訪日研修

「中国ふれあいの場」の運営に中心的に関わる中国大学生を約1週間日本に招へいし、文化体験やフィールドワーク、日本人大学生との交流活動などを通して日本についての理解を深めるとともに、互いのふれあいの場の運営について学び合うことを目的とした研修を行っています。



ふれあいの場での活動を振り返ることで自身の理解も深まりました。同時に、他のふれあいの場を参考にしてさらに改善できる箇所を探し、発展させていきたいです

研修メンバーとの交流は非常に素晴らしかったです。私たちはお互いをサポートし、協力して様々な活動を行いました。チームワークとコミュニケーションの重要性を学び、お互いの意見や経験を共有することで、より豊かな学びの場を創り出しました

研修中に体験した絵付け、華道などふれあいの場で関連するイベントを実施したいです。そして日本の学生さんとの交流を通じて日本への理解も深まったため、今後もこのような「対話の場」をいろいろ作りたいと思います



ふれあいパートナーズ事業

ふれあいの場からの、「ふれあいの場に行ったらいつも日本人と交流ができたらいのに…」という声から、2016年にふれあいパートナーズ事業を開始しました。ふれあいパートナーズはふれあいの場のある中国の大学に日本語教師として勤務しながら、ふれあいの場の活動をサポートする事業です。事業開始後、短期の派遣を含めると計10か所のふれあいの場へ派遣しました。ふれあいパートナーズ第3～4期の作間温子先生は2018年10月から2020年7月までの約2年間、貴州大学の「貴陽ふれあいの場」で活動し、日本語コーナーや交流会、文化紹介イベントなどの企画・開催に精力的に取り組まれ、学生と先生方からの信頼も厚く、ふれあいの場の活性化と現地の日中交流に貢献されました。



作間先生のある日のスケジュール

授業 - 日本語学科2年生-聴解(火)(木)計4コマ

- 午前 8:00-9:50 日本語学科の授業担当 (口語・聴解・日本文化理解など)
- 10:10-12:00 授業準備 (教材作成、宿題の確認)
- 午後 14:00-18:00 ふれあいの場
- 〈活動例〉
- ・カウンターパートの学生たちとの打ち合わせ、イベント準備
- ・イベントの実施
- ・日本語の個別相談・指導

ふれあいの場年間活動

- | | |
|----------------|------------------|
| 10月 もみじ狩り・登山会 | 4月 茶話会・日本語スピーチ大会 |
| 11月 茶話会・朗読大会 | 5月 茶話会・日本語コーナー |
| 12月 茶話会・クリスマス会 | 6月 茶話会・夏祭りイベント |
| 1-2月 冬休み | 7-8月 夏休み |
| 3月 花見会 (菜の花や桜) | |

中国ふれあいの場 所在地と歴史

中国ふれあいの場 所在地

延辺ふれあいの場

吉林省延吉市公園路977号 延辺大学 融合楼 217室
問い合わせ先: 延辺大学 +86 433 273 3482

ハルビンふれあいの場

黒龍江省ハルビン市学府路74号 黒龍江大学 本館B座 326室
問い合わせ先: 黒龍江大学 外国語学院 +86 451 8660 8962

西寧ふれあいの場

青海省西寧市城東区夏都大街78号 青海民族大学文賢校区内
問い合わせ先: 青海民族大学 +86 971 880 7812

重慶ふれあいの場

重慶市沙坪壩区天陳路12号 重慶師範大学大学城校区集賢楼 421室
問い合わせ先: 重慶師範大学 +86 23 6591 0226

広州ふれあいの場

廣東省廣州市新港西路135号 中山大学外国語学院 618室
問い合わせ先: 中山大学 +86 20 8411 3130

杭州ふれあいの場

浙江省杭州市下沙高教園区学正街18号
問い合わせ先: 浙江工商大学 +86 571 2800 8393

昆明ふれあいの場

雲南省昆明市呈貢新区大学城 雲南師範大学呈貢校区 図書館 604室
問い合わせ先: 雲南師範大学 +86 871 6591 2939

済南ふれあいの場

山東省済南市長清区大学路1号 山東師範大学文淵楼A437室
問い合わせ先: 山東師範大学 +86 531 8618 1736

長沙ふれあいの場

湖南省長沙市岳麓区麓山南路1号 湖南大学外国語学院B1階
問い合わせ先: 湖南大学外国語学院 +86 731 8882 1135

西安ふれあいの場

陝西省西安市長安南路199号
問い合わせ先: 陝西師範大学外国語学院教学六楼日語資料室 +86 29 8530 8892

貴陽ふれあいの場

貴州省貴陽市花溪区 貴州大学 東キャンパス 外国語学院 223室
問い合わせ先: 貴州大学 外国語学院 +86 851 8829 2035

アモイふれあいの場

福建省漳州招商局漳州開發区厦門大学漳州キャンパス
問い合わせ先: 厦門大学漳州キャンパス図書館4階・厦門大学嘉庚学院 +86 596 6288 188

桂林ふれあいの場

広西桂林市雁山区雁中路1号
問い合わせ先: 広西師範大学雁山校区文三区 504室 +86 773 3698 0562 30

フフホトふれあいの場

内蒙古自治区呼和浩特市玉泉区錫林郭勒南路49号
内蒙古大学 南校区 芸術楼2階 F2005室
問い合わせ先: 内蒙古大学 外国語学院 +86 471 4996 352

南昌ふれあいの場

江西省南昌市東湖区湖濱南路72号
問い合わせ先: 南昌高松中日友好会館 +86 791 8889 0989

中国ふれあいの場 歴史

2007年4月	成都ふれあいの場設立 (中日会館 (旧名称: 広島四川中日友好会館)) ~2025年3月31日)
2008年5月26日	長春ふれあいの場設立 (長春図書館: ~2015年3月31日)
2008年6月21日	延辺ふれあいの場設立 (延辺大学)
2008年12月	南京ふれあいの場設立 (金陵図書館: ~2017年3月1日)
2009年9月18日	西寧ふれあいの場設立 (青海民族大学)
2009年10月22日	ハルビンふれあいの場設立 (黒龍江大学)
2009年10月	連雲港ふれあいの場設立 (連雲港少年児童図書館: ~2017年3月31日)
2010年6月20日	重慶ふれあいの場設立 (重慶師範大学)
2010年9月19日	広州ふれあいの場設立 (中山大学)
2011年7月26日	大連ふれあいの場設立 (大連中日文化交流協会: ~2013年3月31日)
2012年3月17日	杭州ふれあいの場設立 (杭州図書館: ~2014年3月31日)
2013年4月7日	昆明ふれあいの場設立 (雲南師範大学)
2013年11月23日	済南ふれあいの場設立 (山東師範大学)
2014年11月15日	杭州ふれあいの場移転 (浙江工商大学)
2015年10月14日	長春ふれあいの場移転 (吉林大学外国語学院: ~2025年3月31日)
2016年5月	南昌ふれあいの場設立 (江西師範大学: ~2020年3月31日)
2016年12月17日	長沙ふれあいの場設立 (湖南大学)
2018年1月17日	西安ふれあいの場設立 (陝西師範大学)
2018年3月30日	貴陽ふれあいの場設立 (貴州大学)
2018年7月4日	アモイふれあいの場設立 (厦門大学嘉庚学院)
2018年7月5日	桂林ふれあいの場設立 (広西師範大学)
2019年4月1日	南京ふれあいの場移転 (南京師範大学: ~2020年3月31日)
2019年5月21日	フフホトふれあいの場設立 (内蒙古大学)
2022年4月1日	南昌ふれあいの場移転 (南昌高松中日友好会館)

ネットワーク強化事業 —友情の輪がつながる、広がる—

日中の青少年間のネットワーク構築を目指すネットワーク強化事業では、共同作業に重きを置いたさまざまな交流プログラムを実施しています。

日本の大学生と「中国ふれあいの場」の学生が協力し、企画から運営まで行い交流を深める「大学生交流事業」をはじめ、事業参加者のフォローアップを目的としたアルムナイイベント等を行っています。この他にも、当事業を日中両言語で発信する「心连心ウェブサイト」(<http://xinlianxin.jp.go.jp>)を運営しています。

大学生交流事業

日本の大学等に所属する大学生グループが日本文化に関するイベント企画を立案し、「中国ふれあいの場」の学生達と一緒にイベント準備・運営を行う事業です。

参加グループは一般公募し、採用となったグループがふれあいの場へ渡航し、ふれあいの場に集まる現地学生や近隣の方々を対象として半日～終日の日本文化イベントを行います。

コロナ禍ではオンラインでできる企画を考えイベントを実施しました。

本事業の特徴は「学生主体」であること。学生の自由な発想でゼロからイベントを企画し、準備・運営まですべて学生が行います。伝統的なものから現代的なものまで、実にさまざまな参加体験型の企画が生まれています。



2025年3月実施 Chibaltz×アモイふれあいの場 「千葉を感じよう!～郷土料理と伝統工芸～」

グループ全員が千葉県の大学に通う学生として、中国の方に千葉県の食文化や伝統工芸などについて知ってもらうことを目的としイベントを企画。房州うちわ作りと千葉ネイル体験を行い、千葉県の魅力を発信するイベントを開催しました。



Chibaltzメンバー（中野健太さん、田代花子さん、武藤丈さん、林香里さん）

房州うちわ作り体験

日本から和紙とうちわの骨組みを持参し、うちわの表面のデザインは厦門大学嘉庚学院書道部の方が行ってくれました。当日は会場の体育館内が少し暑かったこともあり、うちわ企画は小さな子から大人まで大変好評でした。うちわのデザインを担当した書道部の方がうちわ1枚1枚にそれぞれ異なる中国古代の詩を書いてくださり、日中の文化が融合した素晴らしい体験になったと思います。



千葉ネイル体験

千葉県の花である菜の花や千葉氏の家紋など千葉に関連したデザインのネイルの施術を行いました。同世代の女子学生に大変好評で、施術後の笑顔が印象的でした。厦門大学嘉庚学院は学内にもネイルサロンがあり、中国の学生にとって身近なネイルを通して千葉県の文化を知っていただく良い機会になったと思います。

交流事業ではどのようなことを行ったのですか？

イベント内容を企画し、準備から当日の実施に至るまでは現地の学生と協力して取り組みました。私たちが提案した企画は、「房州うちわ作り体験」と「ネイルアート体験」の2つです。どちらの企画も千葉について少しでも知ってもらうことを目的に考えたもので、房州うちわは千葉の伝統工芸品を実際に作る体験、ネイルは落花生や菜の花といった千葉をテーマにしたデザインを取り入れることで、文化やデザインを通して千葉の魅力を伝える工夫をしました。

どのように企画準備を進めていきましたか？

中国への渡航前に3か月間ふれあいの場の学生とオンラインで準備しました。ビデオ通話やSNSなど中国側と繋がる手段は充実していますが、その手段を通してふれあいの場学生にどう伝えたら意図が通じるか、お互いの仲を深められるかといった交流面での工夫が課題となり、やさしい日本語を使って話してみたり、情報共有する時は日中併記して伝えたり、SNSで毎日交換日記をして関係性を築くなど、皆が主体的に参加できるように意識して準備を進めました。

ふれあいの場を訪問し、イベントを実施していかがでしたか？

準備期間中にふれあいの場の学生とオンラインで交流していたので、やっと会えたという喜び、感動に近い気持ちが強かったです。準備をしている時は現地の状況を全て把握することができなかったので不安要素もありましたが、現地ではとてもあたたかく迎えてもらい、ふれあいの場の学生も僕たち以上に積極的にイベントに取り組んでくれたので、同じ仲間として、助け合いながらワンチームでイベントを実施することができました。イベントを通して様々な考え方に触れ、また働き方が求められたことで、自分自身の価値観の変化や広がりを感じることができ、唯一無二の体験ができたと思います。

大学生交流事業に参加して

2019年3月実施 関西時代×杭州ふれあいの場「関西万博博覧会」

日本・関西のあらゆる文化を紹介するイベントを開催しました。イベントはソーラン節の披露で開幕し、その後4つの常設ブース：料理ブース、芸術工芸ブース、スポーツブース、休憩ブースを設けました。各ブースでは、手作りたこ焼きや宇治茶を提供したり、弓道体験や浴衣の着用体験をしてもらうなど、来場客が日本・関西文化を五感で楽しめるよう工夫しました。



開会式（ソーラン節）



料理（たこ焼き・焼きそば）



芸術工芸
（浴衣・通行手形作り・紙飛行機作り・折り紙・色塗り）



スポーツ
（弓道・ストラックアウト・紙飛行機飛ばし）

2019年3月実施 かなぎガールズ×西安ふれあいの場「七福偉人祭」



神社での奉職経験を活かし、神社の「七福神」と「日本の偉人」を掛け合わせた「七福偉人祭」を企画し、西安ふれあいの場の学生たちと共にイベントを開催しました。七福偉人祭は、日本の7人の偉人をテーマに、偉人ごとにブースを派生させ、日本文化が体験できるイベントです。また、偉人のコスプレをしたスタッフが御朱印を書くという神社要素も盛り込んでいます。



謎解き



着付け&メイク



茶道体験



どら焼き&わらび餅



かるた大会

気の合う親友が たくさんできた



りか
李珂
さん

昆明ふれあいの場の活動に参加してから間もなく、日本の大阪府立大学のグループ「ええじゃないか」が昆明に来て、1週間の交流イベントを行うことになりました。私は早速このイベントに申し込み、お寿司作りのグループに入りました。先輩や日本の仲間の根気強いサポートのお陰で、いなり寿司初体験の私でもお寿司作りの楽しさを存分に味わえたこと、またイベントに参加した学生たちに同じ楽しさを伝えられたことを本当に感謝しています。

その後コロナの影響で1年近く休止していた交流イベントをオンラインで再開することになりました。西南学院大学の「西南【にわか】ガールズ」との交流では、企画の共同担当者になるチャンスを得られたのですが、うれしい反面、これまでにない形式での開催に心の中は不安で一杯です。パソコンの画面越しの交流ということで、ぎこちない雰囲気になり、場が盛り上がりがないのではないかなど、色んな心配事が頭の中を駆け巡りました。しかし最初のビデオ通話をした時、アイスブレイクをきっかけにリラックスした雰囲気でおしゃべりが始まり、みんな興味津々

雲南師範大学日本語学部に入学後、「昆明ふれあいの場」のボランティアとしての活動を開始。2019年9月に大阪府立大学の「ええじゃないか」、2020年3月に西南学院大学の「西南【にわか】ガールズ」、2021年8月に名古屋外国語大学の「熊猫」との交流イベントを実施。

に交流することができたのです。とはいえ、イベント当日もオンライン形式での実施になるのだから、以前のように参加者を満足させることが本当にできるのだろうか、そんな不安がまたすぐに脳裏をよぎります。イベントを開催する3月になり、予想していたとおり日本の仲間と私たちはリモートでつながるしがなく、イベント参加人数も制限されました。しかし、だからこそよりおもしろいイベントになるように知恵を振り絞りました。人数制限があるのなら、イベント期間を長くし、たくさんの人に参加してもらえるようにすればいいのです。みんな忙しくててんてこ舞いでしたが、頑張って企画した内容が一つずつ実現していく様子や、参加者のうれしそうな笑顔を目の当たりにし、心の奥からこれまでにない満足感が湧き起こりました。

ふれあいの場のイベントに参加したことで、視野が広がり、日本語や日本に対して抱いていた好奇心や知識欲が満たされただけでなく、気の合う親友もたくさんできました。このような出会いの場を持てたこと、そして日本の仲間と知り合えたことがとてもうれしいです。海を隔てた国同士、無数の人がいる中で、かけがえのない方たちに出会えたことは、今思い返してもとても不思議で、本当に幸運でした。

「好奇心」と 「思いやり」



おくむら
奥村めぐ
さん

第二言語として中国語を履修したのがきっかけで中国に興味を持ち、漠然と「中国に行ってみよう」と思っていました。偶然大学生交流事業のチラシを見つけ、中国に行けるチャンスだと思い、仲間を募り「愛知アイスブレイカーズ」を結成して応募しました。

準備が始まるまでは、初めてWeChatを使い、アモイの学生と交流する楽しさでいっぱいでした。しかし準備期間は、企画を具体的な形にしていくに当たり業務連絡が増えて、楽しい交流だけではなくなりました。また、今まで対面で会ったことがない仲間と一つのイベントを成功させることができるか不安もありました。しかし渡航後、アモイの学生が様々なおもてなしをしてくれたことや、学生寮での滞在により、一日中共に過ごしたことで仲を深めることができました。当日は、予想以上に多くの人々に来ていただき、来場者が楽しむ姿を見てやりがいを感じました。顔を合わせて間もないメンバーと一つのイベントを協力して成功させられたのは、アモイの学生の皆さんが私たち日本側の学生を、親切に優しく受け入れてくれたおかげであり、ま

2019年3月に愛知アイスブレイカーズのメンバーとしてアモイふれあいの場で日中交流イベント「ふれ愛学校（嘉愛学校）」を実施。

た互いに心を通わせることができたからだと思います。たった6日間の交流だったにもかかわらず別れ際には大号泣してしまうほど別れを惜しみました。

単なる好奇心が動機で参加した私たちは、企画選考、研修、準備と中国への道のりは単純なものではありませんでした。しかし今となっては、この経験は中国に行く他のどんな方法にも代えがたい、最高の選択だったと言えます。大学生交流事業に参加して、一つのものを作り上げるときには、互いに思いやりを持って取り組むことが成功に結び付くと感じました。これを機にさらに中国に興味を持ったとともに国際交流の経験を積みみたいと思うようになりました。

その後アメリカへの留学やオンラインでのふれあいの場学生との交流経験を経て、国際交流では「好奇心」と「思いやり」が大切であると感じました。異文化に対して興味を持ち、相手を尊重して接することで、様々な価値観に触れ、視野を広げられるようになりました。また何よりも、世界各国の人々と心を通わせて友達になることがとても楽しいです。大学生交流事業はそれに気づかせてくれた貴重な経験であったとも言えます。これから社会に出て、様々な経験をしながら多くの人と接することになりますが、どんな時でも「好奇心」と「思いやり」を忘れないようにしていきます。

座談会

Interview

大学生交流事業への参加経験者による座談会 「あの時の挑戦が今の自分を作った」

大学生交流事業に参加した経験を持つ3人が集まり、異なる立場から当時の体験を振り返りつつ、交流事業で得られたものや今に役立っていることについて語っていただきました。

みなみ ありさ
南 有紗さん

2017年に大学生交流事業へ参加。杭州ふれあいの場で現地の学生たちとともにイベントを実施。現在、社会人6年目。組織の人材開発や組織開発を支援する営業職として活躍中。

にひらのぶたか
仁平 信孝さん

2021年に大学生交流事業へ参加。オンラインで長沙ふれあいの場と交流。2023年にふれあいの場サポーター活動に参加。2023年～1年間、ハルビンの黒龍江大学へ留学。現在大学4年生。

ちん けんう
陳 妍宇さん

元成都ふれあいの場の学生。2017年に日本の学生たちを迎え、大学生交流事業を実施。現在は日本の証券会社の投資銀行部門にて勤務。

大学生交流事業に参加した理由を教えてください。

南● 大学2年生の時、同じ大学の友人から誘われたのがきっかけです。中国に特別な関心があったわけではないのですが、公費プログラムで海外に行けることに魅力を感じて、参加を決めました。

仁平● 僕は大学の第二外国語で選んだ中国語のクラスメイトに誘われたのがきっかけでした。中国語を学べる機会になるし、大学生になったら何かチャレンジしたいと思っていたこともあり、参加を決めました。残念ながらコロナ禍で渡航はできず、日本と中国とを結んでのオンラインイベントにはなりましたが、楽しい交流ができました。大学で友だちができるより先に、中国の学生の友だちがたくさんできました（笑）

陳さんは、日本の学生を迎える側として参加されたのですね。

陳● はい。私は中国の大学で日本語を専攻していたので、日本語上達のために成都ふれあいの場に通っていました。そこでは大学の先輩がボランティアをしていたので、私も自然に活動に加わっていききました。ふれあいの場には日本に関する多彩なプログラムがあり、その一つに学生交流事業があって「日本の学生が来る！」と聞いて参加しました。

南さんと陳さんは現地でお客さんを招いての対面イベントを開催していますが、特に印象に残っていることはありますか？

南● 現地に着いて5日目には本番というスケジュールだったので、準備に追われました。事前にオンラインで打ち合わせはしていたものの、やはり情報の行き違いも多々あり、ふれあいの場の学生が私たちのホテルに来てくれて、一緒に準備作業を進めたことが印象に残っています。

陳● 私も深夜12時、1時まで準備や打ち合わせをしていたことが記憶に残っています。しかも、直前になって予定になかった舞台劇をすることになり、メンバー全員が騒然となりました。でも、みんな一生懸命セリフを覚えて演じてくれて、お客さんからも大好評だったので達成感がありました。

大学生交流事業への参加は、みなさんにどのような影響をもたらしたのでしょうか？

南● 私は社会人になって6年が過ぎ、現在は組織の人材開発や組織開発を提供するサービスの営業に携わっていますが、人と組織がどう動くかといったことに関心を持つきっかけになりました。1週間という限られた期間に大人数を動かして1つのプロジェクトを成し遂げるというのは、つまりプロジェクトマネジメントですね。

私は今、多様な人たちがそれぞれの強みを生かして活躍してほしいとの思いで人事領域の仕事に携わっていますが、その思いを強くしたきっかけの1つにあのイベントがあります。

陳● 私は今、日本の証券会社で金融関連の仕事をしています。日本語専攻だった自分がまさか金融業界で働くことになるとは想像もしていませんでした。それも学生時代に成都ふれあいの場での活動を経て日本に交換留学に来て、そこで日本企業をいくつも訪問したことが日本の大学院で経営学を学ぶきっかけにな



左から南 有紗さん、仁平 信孝さん、陳 妍宇さん

● ネットワーク強化事業



り、今の私があります。

日本で仕事をしようと思ったのも、あの時日本の学生と一緒にイベントを作った経験があったからです。

仁平さん、社会人として活躍する二人のお話は何が参考になったのでしょうか。

仁平● 素直にすごいなと思いました。僕は来年の春に大学を卒業する予定ですが、まだその先のことは決めていません。日中交流や留学の経験がどのように将来に繋がるかわかりませんが、自分のペースで働ける場所を見つけたいと思っています。

大学生交流事業を通じて知り合った学生たちとは交流が続いていますか？

南● イベントを終えてからは個人的に二度、知り合ったふれあいの場の友だちに会いに行き、現地で一緒に遊んでもらったりしていました。今は互いに就職して連絡も途絶えがちですが、日本に来る時は連絡をくれますので、時間を合わせて食事に行くこともあります。

陳● 私は日本にいますので、たまに日本の友だちと連絡を取り合っています。ちょうど先々週にも一緒に食事をしたところです。

仁平● 僕も実際に会ったふれあいの場の学生とは今もよく、連絡を取り合っていますね。ふつうに友だち付き合いが続いています。

みなさんが大学生交流事業で得たものについて教えてください。

南● どんなことも、やってみれば意外にできるものだという自信を持てた気がします。この事業に参加する前は、国際交流や社会貢献に関心はあっても、選ばれた人の活躍する場だと、遠い世界のことだと思っていました。でも、限られたスケジュールの中で、ふれあいの場の学生たちと協力して1つのイベントを作り上げた経験によって、世界が開けた感覚になりました。

誰かと話してみると、知らなかったことを知る機会にもなりますから、人と距離をとるなんてもったいないし、経験や知識がなくても、別に最初からあきらめる必要はなくて、やって

みれば意外にできるかも!と思えるようになりました。

仁平● 交流事業に参加したことで中国語をさらに学びたいという気持ちが強まったのは確かです。その後、中国留学をすることにもなりました。中国語を通して世界が広がってきましたね。

陳● 実は、私の故郷は2008年の四川大震災で被災しました。学校は倒壊してしまい、中学時代は仮設校舎で授業を受けていましたので、部活もできませんでした。高校になると中国では勉強がものすごく大変なので、他に何もできません。ですから、多くの人と一つのゴールに向かって力を合わせて、何かを成し遂げた経験は、このイベントが初めてでした。そういう意味で、貴重な経験でした。

最後に、大学生交流事業に関心を持つ学生の方々にメッセージをお願いします。

南● 今、日本の職場は海外の方の割合が増えていて、多様な価値観を持っている人と同じ職場で働くことも増えています。ともすれば、違う価値観を持つ人に距離を感じることもあると思いますが、その人の置かれた状況や背景を知ることによって理解や納得できることは多々あります。私はこの交流イベントを通じて、国や地域が違っても結局は人対人なんだと気づくことができました。その感覚がわかると、社会に出てどのようなチームに所属しても、対応できるようになると思います。

陳● 私も南さんのお話に同感です。社会人になると多様な人と組んで、1つの目標に向かっていくことになります。学生の間に交流イベントの経験をしておくことは、社会に出てから必ず役に立つと思います。

仁平● 留学中に、中国の学生にこんなふうに言われました。「日本に対してあまり良いイメージはなかったけど、君と出会ってイメージがよくなったよ」。その言葉を聞いた時、僕は感動しました。これが日中交流の活動に参加してきたことの意義だと感じたからです。これまでの経験を今後どのように生かせるかはわかりませんが、自分に合った道をこれから選びたいと思っています。

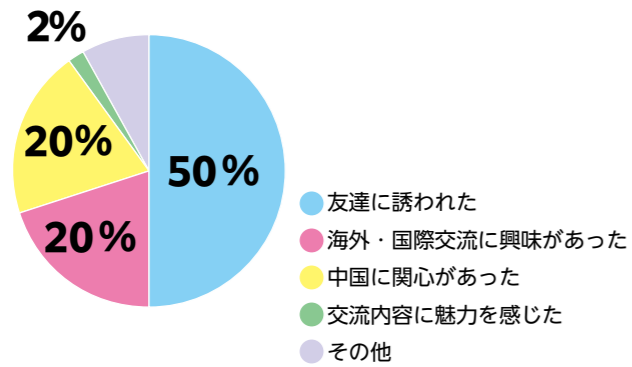
取材・文・写真：大島七々三
取材日：2025年2月11日

● ネットワーク強化事業 ● 35

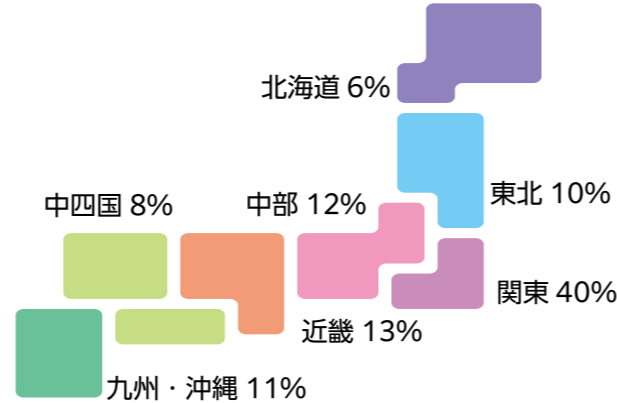
大学生交流事業参加者に聞きました！



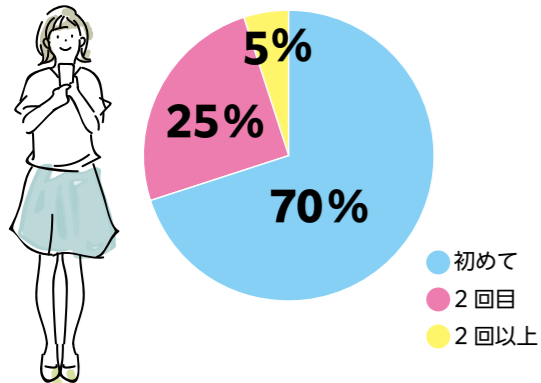
Q1 事業に参加しようと思ったきっかけは何ですか？



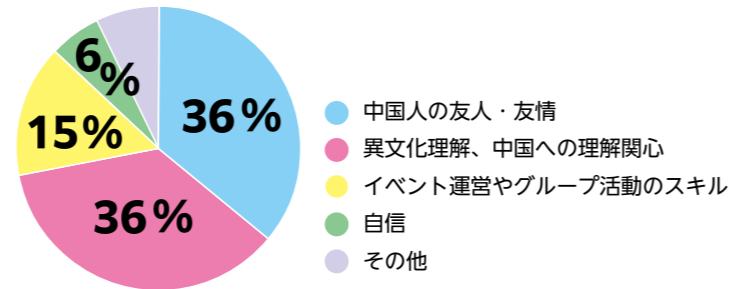
Q2 事業への参加当時、どの地域から参加しましたか？



Q3 事業への参加当時、初めての中国渡航でしたか？



Q4 事業へ参加して良かったこと、得られたものは何ですか？



Q5 事業への参加を通じて、自分が変わったところ（成長したところ）はありますか？

与えられた環境の中で最大限に自身ができることを模索する力

リーダー経験やグループで企画する経験を積むことが出来て、社会人になってからも仕事で役立っています

「つながる」ということに前向きになれたことです。
日本人でも気の合わない人や嫌いな人はとりあえず無視して、コスパ良く生きようとしています。
しかし、そうではなく言語も文化も違ってても分かり合えるものはある。
そうした自信を提供してくれました

初めてのことに怖がらず、自分なりに挑戦してみようと行動できるようになった。
また、新しいことを知るとい楽しさを覚えられ、学ぶことが好きになれた



Q6 事業での反省点や改善点はありますか？

計画をしっかりと立てて頑張ったつもりだったけど、現地ですべてやってみるとまだまだ詰め甘い部分があったりして、もっとオンライン会議の時間に話し合えばよかったと感じた

準備を早く進めれば良かった。リーダーとして1人で抱え込まずもっとうまく人に頼ったり仕事を振れば良かった

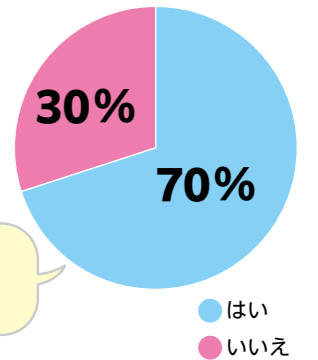
グループのメンバーをうまく頼れず、自分がいっぱいになってしまっていてメンバーは何をすれば良いのか...という状況もありました。イベントは楽しんでもらえましたが、自分のリーダーとしての動きは反省点しかなく、帰国直後はもう一度やり直したいと思ったほどです

Q7 今でもふれあいの場学生とのつながりがありますか？

10年経っていても、時折集まったり、SNSで連絡をたまに取っています

帰国後もグループとして月1回のオンライン交流会を実施しているほか、個人チャットにおいてもお互い言語について質問したり、日常生活の報告をしたりしている

学生が来日したときに一緒に遊んだり、コロナ禍中にグループ通話をしたりしました。自分の結婚式に来てくれた中国人メンバーもいます



Q8 事業へ参加する後輩たちに伝えておきたい！と思うことを自由に書いてください

必ず自分を成長させてくれる貴重なプログラムです！迷っていたら是非挑戦してみてください！

私が一番伝えたいのは、「実際に自分の目で見て、対面で交流することの大切さ」です。
ニュースや人から聞いた話だけで相手の国を判断してしまうことは簡単ですが、実際に現地で人と出会い、会話をするだけでしか感じられない温かさや優しさがあります。
私自身、この交流事業を通して中国の方々の思いやりや前向きな姿勢にたくさん触れることができました

そこには、日本では知り得ない中国の姿、感じ得ない日常の生活、つながり得ない友達があります！
ふれあいの場での活動と経験は、必ず生涯の財産になると思います！

何年経っても行って良かったと思えるプログラムです。
これからの長い付き合いになるかもしれない友との出会いにもなるかもしれません

今まで自分が行ったことのない所で不安になる事も多々ありますが、イベントを終えた後の達成感やその後の中国の学生さんたちとの関わりは一生の宝物です。
失敗、成功とかを考えず、まずは思いっきり自分のやりたいことを形にして楽しんでください！！



中国ふれあいの場サポーター事業

中国「ふれあいの場」を支援する、日本の大学生による活動です。長期インターンシップのように、スタッフとして活動の企画・運営をオンラインでサポートします。草の根レベルの交流を通じて日中の相互理解を促進することを目的とし、中国で日本語を学ぶ大学生達と交流、対話しながら、皆さんが企画した日本文化に関するイベントを約半年にわたって「中国ふれあいの場」に向けて定期的に行います。コロナ禍による渡航規制が緩和された際は、活動の最終月にふれあいの場へ渡航し、ふれあいの場学生達と対面でのイベントも行いました。

オンラインでの活動



かわむら まあや
河村 舞彩
さん

法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻
2023年、杭州ふれあいの場と済南ふれあいの場でサポーター活動を行う

これまでの国際交流活動では、交流の「輪」の中に入って「輪」の一員になっていくという感覚がありましたが、ふれあいの場サポーターは、ふれあいの場の皆さんと一緒に「輪」を作り、その「輪」を広げていくことができる活動だと感じました。全ての出逢いに感謝をし、これからも積極的に国際交流に携わっていきたいです



日中の学校生活



日中クイズ大会



名物料理紹介

ふれあいの場での活動



長沙ふれあいの場 夏祭りイベント

(2024年3月実施)

チョコバナナと駄菓子釣りの屋台を出し、ステージではソーラン節とラジオ体操を披露しました。駄菓子釣りでは日本で親しまれているあらゆる種類のお菓子里にふれてもらいました。

ソーラン節では観客に「ソーラン、ソーラン」の掛け声の掛け合いを求めたり、一緒にラジオ体操をしようと呼び掛けたりしました。会場が一体となって掛け声や体操をするという熱気のある空間を創り出すことができました。



貴陽ふれあいの場 体育交流イベント

(2024年3月実施)

日中それぞれ種目を出し合い、日本の種目は「借人競走」「ドッジボール」、中国の種目は「夢ト蹲」「バドミントン」を行いました。イベントでは3チームに分かれて得点を競い合い、参加者同士の団結力が強まり、楽しい交流をすることができました。

借人競走ではみんな全力ダッシュでお題を取りに行き、お題に書いてある人を必死に探して大盛り上がりでした。ドッジボールは中国の学生には馴染みのない遊びだったそうですが、すぐにルールを理解して楽しく行うことができました。

アラムナイイベント

国際交流基金では、日中21世紀交流事業の過去参加者を対象とした交流会を開催しています。

日中21世紀交流事業 参加者交流会

2023年2月、日中21世紀交流事業の過去事業参加者を対象とした交流会を開催しました。コロナ禍のため対面での交流がかなわず、オンライン交流が続いてきましたが、今回の交流会では、日本在住の中国高校生長期招へい事業・中国ふれあいの場事業・大学生交流事業などの参加者や関係者100名以上

が一堂に会し、当時の経験の振り返りや、その経験が現在にどのように活かされているかなどを語り合いました。同窓会のようなあたたかな雰囲気の中、改めて参加者同士をつなぐ絆の強さや尊さを実感する時間となりました。



心連心：中国高校生長期招へい事業 修了生交流会

事業のフォローアップとして修了生交流会を行い、意見交換や進路のフォロー、ネットワーク強化の機会を設けています。



2017年3月 北京



2018年7月 東京



2024年3月 大阪



2024年8月 上海

大学生交流事業 参加者交流会

2024年2月、これまでの大学生交流事業とふれあいの場事業の参加者を対象とした交流会を開催しました。当時の振り返りや近況報告などを語り合い、また実行委員に

よる「ビンゴゲーム」「日中クイズ大会」といった日中交流企画を実施し、参加者同士の新たな交流が生まれるきっかけの場にもなりました。



日中国交正常化50周年記念事業

国際交流基金では、日中国交正常化50周年を記念して、両国青少年間のさらなる交流深化、日中間のネットワーク強化のために、2022年に以下3つの事業を実施しました。

ショートショート創作コンテスト

日本語を使って自由な発想でショートショート（超短編小説）を創作するコンテストを実施しました。事前に中国ふれあいの場でショートショートの書き方講座を行い、コンテスト（テーマは自由、日本語で書かれた1,000字以内の作品、未発表であること）を実施したところ、日本と中国の大学生・高校生等から発想力に富んだ作品の応募が多数ありました。ショートショート作家の田丸雅智氏と国際交流基金にて審査を行い、最優秀賞と優秀賞を決定しました。最優秀賞は盧聖

苗さん（山東師範大学）の『飴の温かさを持ちたい石』と、浅井香帆さん（中京大学）の『雨の日見えない先輩』が選ばれ、最優秀賞の2作品は日中2か国語声優として活躍する劉セイラ氏に朗読いただき、朗読動画を作成しました。

受賞作品は心連心ウェブサイトでご覧いただけます。



—あなたの周りの美しさを発見しよう—写真・動画大会

私たちの身のまわりには、普段はあまり気づかないけれども映像に記録して見れば美しく、鑑賞に値する風景や事象がたくさんあります。みなさん一人ひとりの生活の場からそうした空間・時間を切り取って集め、日中の新たな魅力を再発見し

ようという企画です。日中双方から、バラエティに富んだ実に様々な写真・動画が寄せられました。夏休みの実習時に見上げた青空、数百年の歴史を持つふるさとのまつり、道端に咲き乱れる名もない花々のアート、登校中に会った日常習慣の一幕、縁側にたたずむお年寄りの素朴な表情…。日中の学生が撮影した写真・動画には、説明文が添付されそれぞれの場所で暮らす日中学生の思いがひしひしと伝わってきます。



趙雨晴さん(浙江工商大学)



黄晓睿さん(貴州大学)

日中高校生対話・協働プログラム

日中高校生の相互理解を促進するプログラムとして、「日中高校生対話・協働プログラム」を実施しました。このプログラムは、日本と中国の高校生が教諭の指導のもと、お互いの文化や社会についてオンライン交流を行うものです。主な交流テーマは、現代文化・地域文化紹介、将来・

キャリア探求、共同制作（アート、動画、写真等）の3分野。日中両国の高校生が、学校生活や地域社会等の共通課題の解決についてディスカッションし、オンラインでの交流を通じてお互いの文化や社会について理解を深めながら、連帯や協力の意識を育みます。



日中21世紀交流事業「心連心」テーマソング

『対面—君と向き合って—』

詞曲：李浩／日本語詞：国際交流基金

一道彩虹跨過海 我们就在两端
你揮動着的双手 我能够看得见
经历过风雨之后的天空会更蓝
昨天曾伤心的脸 慢慢绽开笑颜

海に架かる虹の橋 その両端に僕らがいる
僕には見えるよ 手を振る君の姿が
嵐の後の空が こんなにも青かったなんて
昨日の悲しみは きっと笑顔に変わるよ

从不了解到了解 从怀疑到相信
鼓起勇气伸出手 握紧了就是朋友

知らなかった世界を知ってみよう 信じられなかった人を信じてみよう
勇気を出して両手を広げよう その手を握り合えば友達になれる

面对面 我的眼睛里映着是你的脸
手牵手 我们就能够向着一个方向走
心连心 才能了解彼此存在的理由
我和你这样还会有什么话说不出口

Face to face, 僕の瞳に映る君の顔
Hand with hand, きっと同じ道を歩いてゆけるよ
Heart to Heart, 確かめ合おう 僕たちがここにいるわけを
もう話せないことなんて 何もないんだから

如果能选择一天 取个名字叫永远
我的答案就是今天 因为有你在身边
有勇气一同回首才能够一起向往前走
有哭有笑有感动 彼此真心接受

たとえある日「永遠」が約束されても
僕は「今日」という日を選ぶよ それは君がここにいるから
勇気をもって振り向けば 一緒に歩いてゆけるさ
泣いて笑って心震わせて その気持ち受け止めよう

从不了解到了解 从怀疑到相信
鼓起勇气伸出手 握紧了就是朋友

知らなかった世界を知ってみよう 信じられなかった人を信じてみよう
勇気を出して両手を広げよう その手を握り合えば友達になれる

面对面 我的眼睛里映着是你的脸
手牵手 我们就能够向着一个方向走
心连心 才能了解彼此存在的理由
我和你这样还会有什么话说不出口

Face to face, 僕の瞳に映る君の顔
Hand with hand, きっと同じ道を歩いてゆけるよ
Heart to Heart, 確かめ合おう 僕たちがここにいるわけを
もう話せないことなんて 何もないんだから

国際交流基金日中21世紀交流事業 20年のあゆみ
2026年3月発行

独立行政法人国際交流基金
〒160-0004 東京都新宿区四谷1-6-4 四谷クルーセ3階
Tel 03-5369-6074



国際交流基金
公式ホームページ



日中21世紀交流事業
公式ホームページ